

86 80

訂刪  
國文學小史

文學士和田萬吉  
永井一孝 編纂



教育書房發行



## 凡例

- 一 本書は、曩に著したる『國文學小史』を刪訂して、我が國文學の起源、發達及び變遷の大要を叙述したるものなり。
- 一 本書に用ゐたる文學上の名稱は大方世間に慣用せらるるものを採れり。
- 一 本書は、時代の區分に従ひて編を分ち、每編必ず總論ありて各時代の文學上の大勢を叙説せるのみならず、歌謡及び散文の各條下にも亦それらの總説ありて其の大要を略述せり。
- 一 本書は、著明なる文學者の生死の年を示さむが爲に、其の人名の下に、數字にて紀元の年數を註記せり。
- 一 歌文の實例は専ら參考の爲に引用したるものなり。故に、

凡例



凡例

二

成るべく簡短なるものを探り、又は節略して掲げたり。然れども、授業時間の少き場合には、教師の見込によりて、なほ多少の省略を施すも妨げなし。

一 歌文の實例は、成るべく當該文學者の傳記又は評論の次に挿入せりと雖も、それが爲に却つて煩瑣に流るゝ嫌ある場合には、章又は節の末に一括して掲げたり。

一 歌文の實例は、専ら原本に従へりと雖も、讀者の便利を慮り、著者の見によりて適宜に句讀點を施せり。

一 祝詞宣命『萬葉集』古事記『風土記』等の文例は、其の書き方を示さむが爲に、孰れも原本のまゝを掲げ、別に假名書きを對照して讀解に便じたり。

一 本書は中學校師範學校高等女學校の生徒用教科書並に國文學研究者の自修用書として編述したるものなり。教

師用並に自修者の參考用として、他日詳細なるものを出版すべしと雖も、曩に發行したる『國文學小史』亦參考資料たるべし。

明治三十三年八月二日

著 者 識

凡例

三



訂刪 國文學小史目次

緒論

文學……文學史……文學と人情社會との關係……文學史と一般歴史との關係……一國文學の特色及び變遷……我が國文學……文學の二種類……國文學上の時代別

第一編 奈良時代以前の文學

第一章 總論

奈良時代以前の範圍……國初の狀況……神代文字……漢字の傳來……漢字漢學の傳播……佛教の傳來……本期文學の特色種類

第二章 歌謠

神代の歌……人代の初の歌……其の性質……連歌旋頭歌の起源……歌垣……歌の形體……歌の姿……例

第三章 散文

上古の散文……祝詞壽詞……其の組立……其の佳作……其の作られし時代……其の文體……例

目次



第二編 奈良時代の文學

第一章 總論

奈良時代の範圍……漢學……佛教……國文學の發達……  
思想……言語……國字の製作……印刷術の傳來……

第二章 歌謠

第一節 總説……………二〇

歌界の概況

第二節 『萬葉集』

編輯の時代並に撰者……歌の年代……歌の形體上の類  
別……歌の内容上の類別……歌語……歌の書き方……  
……歌の姿情……感想……主なる作者……柿本人麿……  
……山上憶良……山部赤人……大伴家持……例

第三章 散文

第一節 總説……………三六

散文界の概況……散文の種類

第二節 宣命……………三七

宣命の意義……作者……文體……文詞……書き方……

……例……佳作

第三節 『古事記』……………四一

修史の始……『古事記』の撰進……文體……書き方……  
性質……例

第四節 風土記附氏文……………四七

風土記の撰進……『播磨風土記』……風土記の文體……  
記事……作者……例……氏文

第三編 平安時代の文學

第一章 總論

平安時代の範圍……漢學……國文學の復興……其の内  
容……言語……平假名の製作

第二章 歌謠

第一節 總説……………五五

和歌の復興……歌合……長歌の衰微……短歌の進歩  
……朝廷の和歌奨勵……勅撰の歌集……私撰の歌集  
……連歌……今様歌……神樂……催馬樂……朗詠……  
……和歌の衰運……方式……歌學書



第二節 『古今和歌集』……………五九  
 撰進の時代並に撰者……………歌想……………『萬葉』歌との比較……………主なる歌人……………在原業平……………紀貫之……………例

第三節 『古今集』以後の勅撰歌集……………六五  
 『後撰和歌集』……………『拾遺集』……………『三代集』……………『拾遺集』以後の勅撰歌集……………其の長短……………『古今集』以後の歌人……………藤原公任……………源俊賴……………藤原俊成……………例

第三章 散文……………七二  
 第一節 總説……………七二  
 散文界の概況……………假名文出づ……………物語……………消息文……………散文時代……………散文の類別……………七二

第二節 小説……………七五  
 『竹取物語』……………例……………『伊勢物語』……………『大和物語』……………例……………『住吉物語』……………『宇津保物語』……………『落窪物語』……………『滋松中納言物語』……………『堤中納言物語』……………『源氏物語』……………紫式部……………『源氏物語』著作の時代……………『源氏物語』の結構……………二段に分る……………『宇治十帖』……………『源氏物語』の文章……………例……………『狹衣』……………と

りかへばや物語……………翻譯小説『唐物語』……………八四

第三節 歌序……………八四  
 歌序の二種……………『古今集』の序……………『大堰川行幸和歌』の序……………例……………八七

第四節 日記及び紀行……………八七  
 日記紀行……………『土佐日記』……………例……………『更科日記』……………『紫式部日記』……………例……………『蜻蛉日記』……………『和泉式部日記』……………『讃岐典侍日記』……………九二

第五節 隨筆……………九二  
 隨筆の意義……………清少納言……………枕草子……………例……………九五

第六節 雜史……………九五  
 雜史の性質……………『榮花物語』……………例……………『大鏡』……………藤原爲業……………例……………『水鏡』……………『今鏡』……………『宇治大納言物語』……………『宇治拾遺物語』……………例……………一〇四

第四編 鎌倉時代の文學……………一〇四  
 第一章 總論……………一〇四  
 鎌倉時代の範圍……………其の文學の特徴……………漢學の衰微……………一〇五



第二章 歌謡

- 第一節 總説 ..... 一〇七
- 歌界の概況 ..... 歌合の流行 ..... 和歌の衰微
- 第二節 勅撰歌集 ..... 一〇九
- 『新古今和歌集』 ..... 『新古今』以後の勅撰歌集 ..... 西行
- ..... 藤原定家 ..... 藤原家隆 ..... 源實朝 ..... 例

第三章 散文

- 第一節 總説 ..... 一一八
- 散文界の概況 ..... 散文の類別
- 第二節 小説附消息文 ..... 一一九
- 『鴨門中將物語』『秋夜長物語』 ..... 『義經記』『曾我物語』
- ..... 例 ..... 繪巻物 ..... 消息文 ..... 例
- 第三節 隨筆 ..... 一二四
- 鴨長明 ..... 『方丈記』 ..... 例 ..... 『發心集』 ..... 『撰集抄』『沙石集』
- 第四節 戰記文附雜史 ..... 一二六

- 戰記文の性質 ..... 葉室時長 ..... 『保元物語』『平治物語』
- ..... 例 ..... 『平家物語』『源平盛衰記』 ..... 例 ..... 雜史 ..... 『十訓抄』『古今著聞集』 ..... 例
- 第五節 日記及び紀行 ..... 一三五
- 『辨内侍日記』『中務内侍日記』 ..... 『海道記』『東關紀行』
- ..... 例 ..... 『十六夜日記』 ..... 阿佛尼 ..... 例

第五編 室町時代の文學

第一章 總論 ..... 一三九

室町時代の範圍 ..... 國文學の消長 ..... 漢學 ..... 言語

第二章 歌謡

- 第一節 總説 ..... 一四一
- 歌界の概況 ..... 連歌の流行 ..... 謠曲狂言の創始
- 第二節 和歌 ..... 一四二
- 『風雅集』 ..... 『風雅集』以後の勅撰歌集 ..... 『二十一代集』
- ..... 『新葉集』 ..... 主なる歌人 ..... 頓阿 ..... 宗良親王 ..... 東常縁 ..... 例
- 第三節 連歌 ..... 一四八



連歌の流行……二條良基……有名なる連歌師……宗  
 祇法師……俳諧調の連歌……山崎宗鑑……荒木田守  
 武……俳句

第四節 謠曲附狂言……  
 謠曲の起源並に發達……流派……曲數……作者……  
 趣向……文章……例……狂言……仕組……文章……  
 曲數……例

第三章 散文

第一集 總説……一五八

散文界の概況……散文の類別

第二節 隨筆……一六〇

✓兼好法師……『徒然草』……兼好の和歌……例

第三節 雜史附戰記文……一六二

『神皇正統記』及び源親房……例……『増鏡』……『三鏡』……  
 『太平記』……例

第四節 御伽草子……一七〇

御伽草子の性質……例……室町時代の小説

第六編 江戸時代の文學

第一章 總論

江戸時代の範圍……江戸文學の種類……發達の源因  
 ……隆盛の時期……洋學の研究……思想……言語と  
 文章と

第二章 歌謡

第一節 總説……一七七

歌界の概況……歌謡の類別

第二節 和歌附狂歌……一七八

和歌の復興……下河邊長流……僧契沖……其の著述  
 ……賀茂真淵……其の著述……萬葉派の歌人……他  
 の一派……小澤蘆庵……香川景樹……以上の外の歌  
 人……歌學書……歌集……例……狂歌……有名なる狂  
 歌師……四方赤良……宿屋飯盛……例

第三節 俳諧附狂句……一九一

俳壇の狀況……松永貞徳……古風……西山宗因……  
 談林風……蕉風……松尾芭蕉……蕉門の十哲……安



目次

永以後の俳壇……俳句の集……俳諧書……例……狂句……例

第四節 淨瑠璃附脚本……………一九七

淨瑠璃の起源及び發達……時代物世話物……近松門左衛門……例……近松以後の淨瑠璃作者……脚本……淨瑠璃脚本の衰微

第三章 散文

第一節 總説……………二〇二

散文界の概況……散文の類別

第二節 和漢混和文……………二〇三

和漢混和文の發達……其の性質……藤原惺窩……林羅山……本期の初めより中頃までの漢學者……其の混和文の著書……貝原益軒……著書……例……新井白石『藩翰譜』折焚く柴の記『讀史餘論』……其の他の著書……例……室鳩巢……『駿臺雜話』鳩巢小説『其の他の著書』……例……天明寛政以降の漢學者並に著書……例

第三節 雅文及び古書の解釋語法の研究……………二一五

雅文家の祖……北村季吟……著書……『大日本史』扶桑

目次

拾葉集……荷田春滿……本居宣長……『古事記傳』……語學上の著書……文章……例……村田春海……『琴後集』其の外の著書……例……橘千蔭……『萬葉集略解』……例……上田秋成……著書……例……寛政前後の國學者……著書……三大家……平田篤胤……『八洲文藻』……例

第四節 小説……………二三二

假名艸子……浮世草子……井原西鶴……例……自笑と其破と……八文字舍風……赤本……黄表紙……讀本……山東京傳……洒落本……曲亭馬琴……著書……勸善懲惡の主義……例……草双紙……滑稽本……柳亭種彦……『田舎源氏』……式亭三馬……浮世風呂『浮世床』……十返舎一九……『膝栗毛』……例……情本……爲永春水……小説の衰微

第五節 俳文及び狂文……………二四五

俳文……横井也有……例……狂文……狂文の作者並に著書……例



訂刪 國文學小史目次終

訂刪 國文學小史

和田萬吉  
永井一孝 合著

緒論

文學は、高尚ある嗜好を基とし、言語によりて人間の思想感情想像を叙ぶるものにして、文學史は其の起原發達及び變遷を秩序的に記載するものなり。

蓋し、人の思想感情想像が、其の最も善美なる形骸に於いてあらはさるゝは、主として文學にあるが故に、此の物は最も善く人情風俗を顯表し、時世社會を反映す、されば、文學史は、一般歴史の一部として見るべきのみならず、亦諸種の歴史を解明するものたり。

緒論

一

文學  
文學史

文學と人情  
社會との關係  
文學史と一般歴史との關係



一國の文學  
の特色及び  
變遷  
我が國文學

文學の二種  
類

緒論

二

夫れ、一國の文學は、人種言語の特性によりて其の特色を生じ、社會制度並に外國思想等の感化によりて變遷するものとす。我が國文學も、亦よく是等の事情によりて特殊のものとなれり。抑、萬世一系の皇統を戴き、敬神忠君の念に富める我が國民の文學が、天地山川の美に養はれ、時世の盛衰に動かされ、儒佛二教の影響を受けて、絶えず變遷し來たれる形跡を尋ぬるは、吾人にとりて甚だ有益に且つ趣味多き問題なるべし。

文學の種類を大別して、歌謡及び散文の二種とす。歌謡とは、一定の規律もて言語を配列する文學を云ふ。我が國の長短歌連歌俳句の如き、即ち是れなり。散文とは、言語の配列に特別の規律なき文學を云ふ。我が國の物語戰記文の如き、即ち是れなり。我が國に於いては、此の二種のもの並に發達して、

國文學上の  
時代別

二千餘年の久しき殆ど中絶せし事なし。

こゝに、我が國文學の歴史を述ぶるに當りて、時代を區別するこゝ次の如し。

**第一編 奈良時代以前** 神代より始まりて崇峻天皇の御代を終ふる頃まで。此の時代の文學として今に傳はるは和歌及び祝詞の類なり。二者共に外國思想の影響を受けず、文質共に質素にして、尙ほ幼稚の境にあり。

**第二編 奈良時代** 推古天皇御即位の頃より桓武天皇の御宇平安奠都の頃まで。漢學佛教の影響既に見え、和歌極盛の時なり。散文には、宣命及び叙事の文あり。

**第三編 平安時代** 桓武天皇平安奠都の頃より、後鳥羽天皇の御宇、源賴朝覇府を鎌倉に開きし頃まで。名媛才女頻りに出で、世は正に散文隆盛の時期なり。和歌また見



るべきもの多し。

**第四編 鎌倉時代** 源頼朝覇府を鎌倉に開きし頃より、後醍醐天皇の建武中興の頃まで。佛教の影響漸く著く、和歌散文共に厭世的趣味を帯び、漢學の影響また少からずして、文體の變革明かに見るべし。戰記文、隨筆の類出でたり。

**第五編 室町時代** 後醍醐天皇建武中興の頃より、後陽成天皇の御時、徳川家康大將軍となりし頃まで。此の時代の文學は、大方僧侶の手に成りたれば、佛教思想を含むこと極めて多し。謠曲、連歌の類大に行はる。平民文學の萌芽は此に兆せり。

**第六編 江戸時代** 家康將軍となりし頃より、孝明天皇の御代、前將軍徳川慶喜公大權を奉還して、王政古に復する頃まで。國學、漢學相並びて興隆し、各種の文學一時に發

し、且つ社會の諸階級舉つて文學を有せり。殊に平民の手に移りしもの、最も隆昌を極めしは、國文學史上空前の事とす。



第一編 奈良時代以前の文學

第一章 總論

爰に奈良時代以前は、神代より崇峻天皇の御代を終ふる頃までを云ふ。

國初の狀況

神代より人皇の世にかけて、國初草昧の頃は、諸般の制度未だ緒に就かず、開化の中心たるべき皇都さへ歷朝處々に移りて一定せざりし程なれば、未だ我が國民をして大文學を有せしむるに至らざりしこと勿論なり。實に當時は、只語部を稱する一部族が僅に口授によりて舊事古説を相傳するのみにて、弘通の文字すらもあらざりき。世に、或は神代文字といふもの社會の一部に行はれたり云ふ人もあれど、該文字を以て記載せる文學は、一も後世に傳はらざるのみな

神代文字

漢字の傳來

らず、其の存在すらも疑はしきものに屬せり。されば、我が國に弘通の文字ありしは、應神天皇の御代に朝鮮の使者阿直岐及び博士王仁の來たりて、皇子稚郎子に經書を授けたる時を始とすべし。此の以前にも、私に漢文字を傳へたる者ありしが如くなれど、未だ弘く流布するには至らざりしなり。其の後、阿直岐王仁等の子孫次第に殖る、文筆の業を以て朝廷に事へしかば、漢文字は漢學思想と共に愈、國內にひろがり、遂に其の文字を假りて國語を寫すに至れり。我が國に純然たる文學あるは、此の頃を以て始とす。繼體天皇の御代に、佛教亦三韓を経て我が國に入りき、かくて、漢學、佛教の攷究は年を追うて盛大に赴きたり。

漢字漢學の傳播  
佛教の傳來

本期文學の特色種類性質

然れども、此の時代の文學には、未だ漢學及び佛教の思想のあらはれたるものなく、言語も亦全く我が國固有のものな



り。本期の文學として今日に傳はるは、口『古事記』、『日本書紀』  
に散見せる歌謠及び『日本書紀』延喜式等に載せられたる  
祝詞、壽詞の類のみ。

### 第二章 歌 謠

神代の歌

我が國の文學は歌謠を以て其の端緒を開きたり。須佐之男  
命が、其の妃櫛名田姫の爲に出雲の國簸の川上ある須賀の  
地に宮を作り給ひける時、雲の立騰りけるを見給ひて、

夜久毛多都	伊豆毛夜幣賀岐	都	ヤクモタツ	イヅモヤヘガキツ
麻基微爾	夜幣賀岐都久流	曾能	マゴミニ	ヤヘガキツクル
夜幣賀岐袁			ヤヘガキツ	

とよみ給へる歌、即ち是れなり。これを吟詠の始として、其の

人代の初の  
歌

其の性質

連歌旋頭歌  
の起源  
歌垣

後、大國主命、沼河姫、下照姫、須勢理姫等、各多少の歌作ありき。  
人皇の世となりては、歴代の天皇、皇后及び群臣等、歌を作れ  
るもの甚だ多し。就中、神武、景行、應神、仁德、允恭、雄略の諸帝、さ  
ては、菟道稚郎子、磐之姫、衣通姫、影媛、勾大兄皇子等、秀詠あり。  
其の外、童謠、俚歌の誦すべきものも亦少からず。蓋し、上古の  
歌は、後世の如く題を設け思を構へて歌を作りたるに非ず、  
事物にふれて起れる感想を發表したるまでなれば、微賤の  
者又童幼さへ歌を詠ざるがありしなり。されば、當時の歌は、  
大抵漠然たる想像と單純なる情感とを反覆せる言詞の中  
に叙べたるに過ぎざりき。さる程に、景行天皇の御代に連歌  
といふもの始めて見え、應神天皇の朝に旋頭歌と名づくる  
もの出で來たれり。武烈天皇の朝には男女相集りて歌を詠  
みかはし、以て相互の意志を通ずる風俗ありき。之を歌垣と



云ふ。推古天皇の頃より、漢學及び佛教の思想著く人心を支配し、大に我が國の文運を誘導するに及び、歌謡の發達次第に明かに、奈良時代に入りては、遂に絶代の隆盛を極むることあり。

歌の形體

此の時代の歌體は、大方五音七音の句數箇を連ねて、後に七音の句一箇を添へたるものなるが、尙ほ一定の形式あることなく、往々三四音又は六八九音を一句こせるもありき。通例五七五七七音の五句を連ねたるを短歌と呼び、五七音の句を更に多く連ねて最後に七音の一句を添へたるを長歌と云ふ。別に連歌といふは、通常の短歌を上下の二節に分ちて、二人にて各一節を作り、恰も一首の姿をなせる歌の謂にして、旋頭歌とは五七七音の三句を再返して通計六句より成れる歌を云ふ。いづれも當時の通用語の中にて雅なる語

歌の姿

を擇び、おもに疊語對句、枕詞を用ゐて諷詠に適せしめたるのみ。故に、此の時代の歌は、言意兩ながら質素にして、修飾の巧なるものなし。

神武天皇兄磯城を討ち給へる時、御軍しばし疲れたりしかば、よみ給へる歌

多多那米氏	伊那佐能夜麻能	許	タ、ナメテ	イナサノヤマノ	コ
能麻用母	伊山岐麻毛良比	多多	ノマヨモ	イユキマモラヒ	タ、
加閉婆	和禮波夜惠奴	志麻都登	カヘバ	ワレハヤエヌ	シマツト
理	宇加比賀登母	伊麻須氣爾許	リ	ウカヒガトモ	イマスケニコ

菟道稚郎子、異母兄大山守皇子の叛けるを討ち給はむとして、兵を宇治の川上に伏せける時詠める歌

知波夜比登	宇迦能和多理邇	和	チハヤヒト	ウヂノワタリニ	ツ
多理是邇	多豆流	阿豆佐山美	タリゼニ	タテル	アツサユミ

第二章 歌謡



第一編 奈良時代以前の文學

麻由美 伊岐良牟登 許許呂波母  
 閉杆 伊斗良牟登 許許呂波母閉  
 杼 母登幣波 岐美袁淤母比傳  
 須惠幣波 伊毛袁淤母比傳 伊良  
 那那久 曾許爾淤母比傳 加那志  
 祈久 許許爾淤母比傳 伊岐良受  
 曾久流 阿豆佐由美 麻由美

マユミ イキラムト ココロハモ  
 ヘド イトラムト ココロハモヘ  
 ド モトヘハ キミヲオモヒデ  
 スエヘハ イモヲオモヒデ イラ  
 ナケク ソコニオモヒデ カナシ  
 ケク ココニオモヒデ イキラズ  
 ズクル アツサユミ マユミ

第三章 散文

上古の散文

上古の散文として史籍に徴すべきは、此の時代の末に作ら

祝詞壽詞

れたる祝詞壽詞の類あるのみ。祝詞も壽詞も共に神前に告白する詞にて、或は祭祀につきて其の所以を陳じ、或は事物を讃して神徳を稱へ、或は神代

其の組立

の舊事、遠祖の事蹟を陳へて御代を祝するものなり。故に、是等の詞は、以上の目的の外、間接には祭祀に與れる群臣は更なり、遠郷僻地の民に至るまで亦漸次に相承して建國の基本を明かにし、又は人心を公明ならしむる料となりたるなるべし。二者共に、句節を整へ、枕詞を冠し、對句、疊語などありて聲調の流麗なること歌謡の姿にも譲らざる趣あり。是れもご口傳相承の必要なる時代になれりしによるならむ。散文にして歌謡の姿を具ふることは蓋し上代に於ける文學自然の徑路なり。之を此の時代の散文の特色とす。壽詞にては出雲國造神賀詞最も佳く、祝詞にては祈年祭、大祓大殿祭の詞を最も古くして、且つ其の詞うるはしく、調も高雅なり。是等は共に、『延喜式』の中に錄せられて現存せり。

其の佳作

祝詞の起源は、天照大神の天の窟戸に籠りたまひし時天兒

其の作られ



し時代

第一編 奈良時代以前の文學

一四

根命が白しける太諄辭にあるべけれども、其の文今は詳かならず。賀茂眞淵の説に、出雲國造神賀詞は舒明天皇の朝に作られ、大祓詞は天智若しくは天武の頃に作られたれど、今日に傳はれるものは多少後世の改削を経たるものあらむといへり。要するに、祝詞壽詞の作られたる時代は甚だ確かならず。

其の文體

其の文體は、主として漢字の正訓並に正音を併用し、用言の語尾并に助辭は便宜上之を細書し、すべて國語のまゝに寫したり。左に壽詞の一例を掲げむ。

出雲國造神賀詞

八十日日波在登今日能生日  
能足日爾出雲國國造姓名恐  
美恐毛申賜久掛麻久畏岐明

イヅモノクニノミヤツコノカムヨゴト  
ヤソカヒハアレドモ、ケフノイクヒノダ  
リヒニ、イヅモノクニノミヤツコナニガ  
シ、カシコミカシコミモマラシタマハク、

御神登大八島國所知食須天  
皇命乃大御世乎手長能大御  
世止齋止爲氏出雲國乃青垣  
山内爾下津石根爾宮柱太敷  
立氏高天原爾千木高知坐須  
伊射奈伎乃日眞名子加夫呂  
伎熊野大神櫛御氣野命國作  
坐志大穴持命二柱神乎始天  
百八十六社坐皇神等乎其甲  
我弱肩爾太禰取掛天伊都幣  
能緒結天乃美賀祕冠天伊豆  
能眞屋爾危草乎伊豆能席登  
苺敷天伊都閉黒益之天能慮  
和爾齋許母利氏志都宮爾靜

カケマクモカシコキ、アキツミカミトオ  
ホヤシマクニシロシメス、スメラミコト  
ノオホミヨヲ、タナガノオホミヨトイハ  
フトシテ、イヅモノクニノアラカキヤマ  
ノチニ、シタツイハチニミヤバシラント  
シクタテ、タカマノハラニチギタカシリ  
マス、イザナギノヒマナゴカブロギ、ク  
マスノオホカミクシメケヌノミコト、ク  
ニツクリマシ、オホナモチノミコト、フ  
タバシラノカミヲハジメテ、モ、ヤソマ  
リムヤシロニマススメカミタチヲ、ソレ  
ガシガヨリカクニフトダスキトリカケ  
テ、イヅヌサノラムスビ、アメノミカゲ  
トカ、ブリテ、イヅノマヤニアラクサヲ  
イヅノムシロトカリシキテ、イヅヘクロ  
マシ、アメノミカワニイミコモリテ、シ  
ヅミヤニシヅメツカヘマツリテ、アサヒ

第三章 散文

一五



第一編 奈良時代以前の文學

米仕奉氏朝日能豐榮登爾伊  
波比乃返事能神賀吉詞奏賜  
止波久奏(下略)

ノトヨサカノボリニ、イハヒノカヘリゴ  
トノカムホギノヨゴトマヲシタマハクト  
マラス。(下略)

第二編 奈良時代の文學

第一章 總論

奈良時代の  
範圍

こゝに奈良時代と稱するは、政治史上の所謂奈良時代を指  
せるにあらず、其の範圍稍廣くして、推古天皇の朝より平安  
奠都に至る十八代二百年間許りを云ふなり。

本期の漢學

此の期は、盛に唐土の文物を模倣したる時代にして、學校の  
建設愈多く、遣唐使、留學生の派遣益加はりぬ。漢學はここに  
朝廷の奨励する所なりしかば、其の進歩著く、學者頻りに輩  
出して、漢文學上の著作多く世にあらはれたり。元正天皇の  
御代に作られたる『日本書紀』、孝謙天皇の朝に編せられたる  
『懷風藻』の如きは、此の間の趨勢を代表するものなり。而して、  
佛教も亦本期に及びて盛に流行し、寺院の建立、佛像の鑄造、

本期の佛教



日に月に増加し、僧尼の數は無慮數千にも餘れり。従ひて、漢學と佛敎とが人心に與へたる變動は甚だ大なるものありしなり。

## 國文學の發達

かゝれば、此の時代に於ける國文學の發達は特に著きものありて、質素なりし風姿は漸く文華燦爛の域に進み、單純なりし思想は次第に豊富の境に入りぬ。散文には『古事記』、『風土記』、『氏文祝詞宣命』の類あり。歌謡には『萬葉集』あり。前者は未だ幼稚あるを免れずと雖も、後者は空前絶後の偉觀たり。後世の人本期を稱して文學上歌謡の時代となす。

## 本期國文學の思想

本期の文學は、漢學及び佛敎によりて發達を促されたる結果、多少儒佛の臭味を交へたり。殊に、漢文詩賦の如きは、全く漢土のそれを模倣せるに外ならず。されども、純然たる國文學を一貫せる思想は、全く國民固有のものにして、かの外教

後をいはせり

## 本期の言語

の主義は未だ日本主義と熟合するに至らざりしなり。言語は、前代の末より漢學佛敎の流行するにつれて、外國語の混交愈多かりしかと、其の音韻稍變化して、能く我が國固有の言語と調和せり。但し、漢學の流行は、記載語の上に至大の影響を及し、從來漢字を假りて國語を寫し、ものも、次第に漢文を以て之に代ふる風を致せり。加之、本期の末には、漢文ならざる文章に未だ普通語たらざる漢語を交へたるが出來て、文章上の用語と普通の用語と漸く離隔せむとする傾向をあらはせり。

## 國字の製作

## 印刷術の傳來

本期の末に始めて國字を見るに至りぬ。之を片假名といふ。此のもの、最初は多畫なる漢字を記する煩勞を避けむがために用ゐられしが、漸く發達して五十音圖の組織とはなりぬ。尙ほ、本期には、孝謙天皇の頃に漢土より印刷術の傳來あり。



りて、更に文運の開進を促せり、されども、片假名及び印刷術が、實際の効果を收めて、文學上に著き裨益を與へたるは次期の事に屬す。

## 第二章 歌謠

### 第一節 總說

太古より千數百年の間、自然の發達に委ねられたる歌謠は、世の進むにつれて、今や未曾有の進歩を爲したり。是れ、前章に記載したるが如く、漢學及び佛教の東漸が、太く人智の開發を促したるに依ること勿論なれど、漢土に於ける詩賦の流行が之を見聞したる國人をして奮發競争の念を起さしめたるにも依れり。是に至りて、從來曾て見えざりし複雑な

歌界の概況

る感想も次第に見え、是れまで定まらざりし形式も遂に略定まりぬ。殊に、持統天皇の朝に、柿本人麿、山部赤人等の出づるに及びて、和歌は極盛の運に達せり。本期の歌謠も、亦多くは事物に觸れて自然の感想を詠出したるものなるが、後には稍、題詠めきたることも行はれたり。天智天皇の朝に、額田女王が春秋の優劣を判じたるが如き、即ち其の一例なり。現存せる歌謠の中には、時に或は拙劣なるものなきにあらず。雖も、概しては工夫は細密に、想像は深刻に、用語は雅馴なり。上は天皇より下は野人に至るまで、歌を詠みたること前期に同じ。當代の歌を集めたるものを『萬葉集』といふ。これ我が國歌集の始なり。余輩が奈良時代の歌謠を知るは、全く此の集あるに依る。



## 第二節 『萬葉集』

『萬葉集』編輯の時代並に撰者に撰者  
其の歌の年代

歌の形體上の類別

歌の内容上の類別

『萬葉集』の成りし時代並に撰者に就いては數説あれど、聖武孝謙兩朝の間に、大伴家持の私に撰びしものごいふ説眞なるが如し。載録するところの歌は、仁徳天皇の御宇より淳仁天皇の朝に至るまで、凡そ四百年間に亘れども、其の大部分は天武天皇以後凡そ九十餘年間のものなり。歌の數は、すべて四千四百九十六首、分ちて二十卷とせり。其の形體に従ひて、長歌、短歌、旋頭歌、連歌等の名目を立てたるは、實に此の集に生まれり。此の外、別に反歌と呼びて長歌の末に一二首づゝ添へたるものあり。こは舒明天皇の頃より出來たるものなるが、全く通常の短歌の體にて、本歌なる長歌の意の足らざるを補ひ、或は其の大意を約言する用を爲せり。此の集また歌の内容によりて部類を立て、雜歌、相聞、挽歌、譬喩歌、四

歌語

歌の書き方

季相聞、四季雜歌の六種とせり。

歌語は、なほ前代に於けるが如く、當時の通用語につきて雅馴なるものを選びたり。かの防人の歌、若しくは東歌の如き、俗語より採りたるには、稍異様なる語も見ゆれど、而も大體に於いて古雅なること都人士の作に譲らざるものあり。『萬葉集』の歌の書き方は、すべて漢字を用ゐたるが、一種獨特の風を具へたり。即ち『古事記』『日本書紀』に出でたる歌は、専ら字音にのみよりて記載し、祝詞は助辭等を細書せしかば、此の集に於いては全く其等と異なりて、漢字の用法につきて一層の進歩をあらはしたり。世に之を萬葉書と云ひ、其等の漢字を總稱して萬葉假名といふ。之を大別すれば、假字、借訓、正訓、義訓の四種となる。此の中、假字には音假字、訓假字の二種あり。二種の假字の中にまた各、正略の別あり。別に、訓



歌の姿情

歌に現はれ

假字には二字一訓なるあり、嗚呼馬聲辛蹄などの如し。義訓には甚だ奇異にして戲謔に類せるものあり、山上復有山を出、十六を猪と讀ませたるが如し。四種の外に、なほ起を巳、弦を玄とせる如く、字畫を省けるあり、山下出風を山下また下風とせる如く、文字を略けるもあり。

此の集の歌は、人々の感情をさながらに詠出して、多く工夫を費さざるが如し、故に、其の姿勢おほむね率直にして雄壯なり。但し、其の雄壯なるは、天真の感情の偶、外界の事物に觸れて發せる聲なりしを以て、時として拙劣の難あるものなきにあらず。想ふに、當時の歌人等は歌謠の美文なるべきを知らずして、其の想の撰擇に意を注がざりしに依るならむ。集中にて傑作多きは長歌なり。

さて、本期の文學は、屢言ひしが如く、漢學及び佛教の普及に

たる感想

よりて著き進歩をなせしが、其等の影響は明かに此の集の歌に見るべし。例へば、大伴旅人が酒を讀せし歌の中に、

古之 七賢 人等毛

欲爲物者 酒西有良師

夜光 玉跡言十方 酒飲而

情乎遣爾 豈若目八目

こいひ、或人の

心乎之 無何有乃郷爾 置而有者

菟孤射能山乎 見末久知香露務

こいへるは、漢籍の知識より來たれるものなり。又、或人の世間の無常を厭へる歌にて、

生死之 二海乎 厭見

潮干乃山乎 之努比鶴鳴

世間之 繁借廬爾 住々而

將至國之 多附不知聞

イニシヘノ ナ、ノカシコキ ヒトタチモ

ホリセシモノハ サケニシアラシ

ヨル、ヒカル タマトイフトモ サケノミテ

コ、ロヲヤルニ アニシカメヤモ

コ、ロヲシ ムカウノサトニ オキタラバ

ハコヤノヤマヲ ミマクチカケム

イキシニノ フクツノウミヲ イトヒミテ

シホヒノヤマヲ シヌビツルカモ

ヨノナカノ シゲキカリホニ スミスミテ

イタラムク、ニノ タツキシラズモ



と詠ぜるは、其の題の如く佛教の思想より來たれるものなり。かゝる例なほ少からず。されども、全集を一貫して見らるゝは、漢學若しくは佛教の旨義にあらずして、全く我が國民的性情なり。茲に國民的性情とは、我が國民が常の心とせる敬神の念、忠君の志氣、さては崇祖の情を云ふ。約言すれば、我が建國の基本とせる惟神の道、彛倫の教、即ち是れなり。

主なる作者

『萬葉集』の歌人の數は甚だ多き中に、殊に傑出せる者を柿本人麿、山部赤人、山上憶良、大伴家持とす。此の四人は能く此の集の歌人を代表するに足る。

柿本人麿

柿本人麿一三六〇前後は、天智天皇の御代に大和にて生れたりといひ傳へたれど、確かならず。二十六七歳の頃より朝廷に出で、持統文武の兩帝に仕へ、新田部高市の諸皇子又は聖駕に従ひて近畿諸國を歴遊せり。後年筑紫に使し、又讃岐

にも渡りしが、終に石見の國にて歿しき。其の歌の『萬葉集』に載れるもの、長歌十七首、短歌五十九首あり。其の調高潔にして、至誠の情内に溢れ、而も叙述に巧みに、時とては雄渾壯大、時とては優婉細緻、能く意に應じて措辭聲調の變りゆくさま、眞に常人の才にあらず。其の長歌に於いて殊に然り。

過近江荒都時作歌

玉手次	畝火之山乃	樞原乃	日	クマタスキ	ウネビノヤマノ	カシハラノ
知之御世從	阿禮座師	神之盡		ヒシリノミヨユ	アレマシシ	カミノコト
樛木乃	彌繼嗣爾	天下	所知食	ゴト	ツガノキノ	イヤツギツギニ
之乎	天見	倭乎置而	青丹吉	ノシタ	シロシメシシラ	ソラミツ
平山越而	何方	所念計米可	天	トラオキテ	アラニヨシ	ヒラヤマコエテ
離	夷者雖不有	石走	淡海國乃	イカサマニ	オモホシケメカ	アマザカル
樂浪乃	大津宮爾	天下	所知食	ヒナニハアラキド	イハバシル	アフミノ

第二章 歌謡 第二節 『萬葉集』



兼 天皇之 神之御言能 大宮者  
 此間雖聞 大殿者 此間等雖云  
 霞立 春日香霧流 夏草香 繁成  
 奴留 百磯城之 大宮處 見者悲  
 毛

反歌

樂波之 思賀乃幸崎 雖幸有

大宮人之 船麻知兼津

左散難彌乃 志賀能大和太 與杼六友

昔人二 亦母相目八毛

山上憶良(一三九三歿)は其の生れし年代詳かならず。天平五年に齡七十四才にて終れりといひ傳ふ。遣唐少錄伯耆守等の諸官を経て、神龜三年筑前守に任ぜられたり。憶良は、頗る漢學に通じ、兼ねてまた佛教をも信ぜしが、殊に漢學は最も

クニノ サ、ナミノ オホツノミヤニ、ア  
 メノシタ、シロシメシケム スメロギノ  
 カミノミコトノ オホミヤハ ココトキケ  
 ドモ オホトノハ ココトイヘドモ カス  
 ミタツ ハルヒカキレル ナツグサカ シ  
 ゲクナリヌル モ、シキノ オホミヤトコ  
 ロ ミレバカナシモ  
 サ、ナミノ シガノカラサキ サキクアレド  
 オホミヤヒトノ フチマチカ子ツ  
 サ、ナミノ シガノオホワダ ヨドムトモ  
 ムカシノヒトニ マタモアハメヤモ

山上憶良

得意とする所なりしかば、其の影響、詠歌の上にて顯然たり。後に掲げたる感情を反さしむる歌の如きは其の適例なり。敬神、忠君の想を叙へたる歌も少からず。憶良の歌は、總じて、道強の姿あるも詞形稍粗雜あり。憶良に一の著書ありて『類聚歌林』といへり。當時の名歌を集録したるものなりしが、今は傳はらず。

或有人不敬父母忘於侍養、不顧妻子、輕於脱履、自稱異俗、先生意氣、雖揚青雲之上、身體猶在塵俗之中、未驗修行得道之聖、蓋是亡命山、澤之民、所以指示三綱、更開五教、遺之以歌、令反其惑、歌曰、

父母乎 美禮婆多布斗斯 妻子美 チ、ハ、ヲ ミレバタフトシ メコミレバ

禮婆 米具斯宇都久志 遁路得奴 メグシウツクシ ノガロエヌ ハラガラウ

兄弟親族 遁路得奴 老見幼見 ガラ ノガロエヌ オイミイトケミ トモ



朋友乃 言問交 余能奈迦波 加  
 久叙許等和理 母智騰利乃 可  
 良波志母與 波夜可波乃 由久弊  
 斯良禰婆 宇既具都遠 奴伎都流  
 其等久 布美奴伎提 由久智布比  
 等波 伊波紀欲利 奈利提志比等  
 迦 奈何名能良佐禰 阿米弊由迦  
 婆 奈何麻爾麻爾 都智奈良婆  
 大王伊麻周 許能提羅周 日月能  
 斯多波 阿麻久毛能 牟迦夫周伎  
 波美 多爾具久能 佐和多流伎波  
 美 企許斯遠周 久爾能麻保良叙  
 可爾迦久爾 保志伎麻爾麻爾 斯  
 可爾波阿羅慈迦

反歌

カキノ コトトヒカハス ヨノナカハ カ  
 クゾコトワリ モチドリノ カカラハシモ  
 ヨ ハヤカハノ ユクヘシラキバ ウケグ  
 ツヲ スキツルゴトク フミスキラ ユク  
 チフヒトハ イハキヨリ ナリデシヒトカ  
 ナガナノラサチ アメヘユカバ ナガマニ  
 マニ ツチナラバ オホキミイマス コノ  
 テラス ヒツキノシタハ アマクモノ ム  
 カブスキハミ タニグクノ サワタルキハ  
 ミ キコシヲス クニノマホラゾ カニカ  
 クニ ホシキマニマニ シカニハララジカ

山部赤人

比佐迦多能 阿麻迦波等保斯 奈  
 保奈保爾 伊弊爾可弊利提 奈利  
 乎斯麻佐爾

ヒサカタノ アマヂハトホシ ナホナホニ  
 イヘニカヘリテ ナリヲシマサニ

山部赤人(一三九〇前後)は人麿と名を等しうせる人なり。其の傳また詳かならねど、聖武天皇の御代を盛りの齡にて過したるが如し、其の官は舍人などにやありけむ。聖駕に従ひて紀伊、大和、伊豫等の勝地を遊覽せしが、東國に下りたることもありき。赤人は殊に自然の美を詠するに妙を得、聲調は閑雅に、想像は穩健なり。其の短歌の概して長歌よりも優れること、恰も人麿の長歌のおほむね短歌にまされるが如し。

望不盡山歌

天地之 分時從 神佐備手  
 高貴寸 駿河有 布士能高嶺  
 乎 天原 振放見者 度日之

アメツチノ ワカレシトキユ カミサビテ  
 タカクタフトキ スルガナル フジノタカ  
 ネラ アマノハラ フリサケミレバ ワタ



第二編 奈良時代の文學

陰毛隠比 照月乃 光毛不見  
白雲毛 伊去波伐加利 時自  
久曾 雪者落家留 語告 言  
繼將往 不盡能高嶺者

反歌

田兒之浦從 打出而見者 眞白衣  
不盡能高嶺爾 雪波零家留

幸于紀伊國時作歌

若浦爾 鹽滿來者 涵乎無美  
葦邊乎指天 多頭鳴渡

春雜詩

春野爾 須美禮探爾等 來師吾曾  
野乎奈都可之美 一夜宿二來  
吾勢子爾 令見常念之 梅花  
其十方不所見 雪乃零有者

ルヒノ カゲモカクロヒ テルツキノ ヒ  
カリモミエズ シラクモモ イユキハバカ  
リ トキジクゾ ユキハフリケル カタリ  
ツギ イヒツギユカム フジノタカネハ

タゴノウラユ ウチデテミレバ マシロニ  
ゾ フジノタカネニ ユキハフリケル

ワカノウラニ シホミチクレバ カタヲナ  
ミ アシベラサシテ タヅナキワタル

ハルノヌニ スミレツミニト コシアレゾ  
ヌヲナツカシミ ヒトヨネニケル  
アガセコニ ミセムトオモヒシムメノハナ  
ソレトモミエズ ユキノフレレバ



柿本人麿



山邊赤人



大伴家持

大伴家持(一四四五歿)は旅人の子なり。聖武天皇の朝より光  
仁天皇に至る五朝に歴事し、累進して従三位中納言持節征  
東將軍となり、桓武天皇の延暦四年に薨ぜり。家持の家は、世  
々軍職にありしを以て、忠誠の心を抽んで、ひたすら父祖の  
名を辱めざらむと力めしこと、自詠の上に見えたり。但し、儒  
佛の思想の加はれること前の三家に比ぶれば更に甚し。想  
像は豊かならねど、感情は燃ゆるが如く、其の歌ふところ哀  
切、痛快なり。

慕振勇士之名歌一首并短歌

智智乃實乃 父能美許等 波播蘇

チチノミノ チノノミコト ハ、ソバノ

葉乃 母能美己等 於保呂可爾

ハ、ノミコト オホロカニ コ、ロツクシ

情盡而 念良牟 其子奈禮夜母

テオモフラム ソノコナレヤモ マストララ

大夫夜 無奈之久可在 梓弓 須

ヤムナシクアルベキ アツサユミ スエ

惠布理於許之 投矢毛知 千尋射

フリオコシ ナゲヤモチ チヒロイワタシ



和多之 刀劔 許思爾等里波伎  
安之比奇能 八峯布美越 左之麻  
久流 情不障 後代乃 可多利都  
俱倍久 名乎多都倍志母

ツルギタチ コシニトリハキ アシビキノ  
ヤツヲフミコエ サシマクル コノロサヤ  
ラズ ノチノヨノ カタリツグベク ナラ  
タツベシモ

反歌

丈夫者 名乎之立倍之 後代爾  
聞繼人毛 可多里都具我禰

マストラハ ナラシタツベシ ノチノヨニ  
キツグヒトモ カタリツグガチ

此等四人に亞ぎて名手と稱せらるゝは、額田女王、長屋王大  
伴旅人、坂上郎女、笠金村、長意吉鷹等なり。之に持統聖武二帝  
を加へて、左に其の詠各一首を擧げむ。

夏歌

持統天皇

春過而 夏來良之 白妙能  
衣乾有 天之香來山

ハルスギテ ナツキタルラシ シロタヘノ  
コロモホシタリ アメノカグヤマ

左大臣葛城王等賜姓橘氏之時御製歌

聖武天皇

橘花者 實左倍花左倍 其葉左倍  
枝爾霜雖降 益常葉之樹

タチバナハ ミサヘハナサヘ ソノハサヘ  
エダニシモオケド イヤトコハノキ

(無題)

額田女王

金野乃 美草刈菴 屋杼禮里之  
兔道乃宮子能 借五百磯所念

アキノヌノ ミクサカリフキ ヤドレリシ  
ウヂノミヤコノ カリイホシオモホユ

故郷里

長屋王

吾脊子我 古家乃里之 明日香庭  
乳鳥里鳴成 君待不得而

ワガセコガ フルヘノサトノ アスカニハ  
チドリナクナリ キミマチカチテ

秋歌

大伴旅人

吾岳之 秋茅花 風乎痛  
可落成 將見衣裳欲得

ワガラカノ アキハギノハナ カゼヲイタ  
ミ チルベクナリス ミムヒトモガナ

竹田庄作歌

大伴阪上郎女

隱口乃 始瀬山者 色附奴  
第二章 歌謡 第二節 『萬葉集』

コモリクノ ハツセノヤマハ イロツキヌ



鐘禮乃雨者 零爾家良思母

— シグレノアメハ フリニケラシモ

鹽津山作歌

笠 金 村

丈夫之 弓上振起 射都流矢乎

— マストラヲノ ユズエフリオコシ イツルヤ

後將見人者 語繼金

— フ ノチミムヒトハ カタリツグガテ

應詔歌

長忌寸意吉磨

大宮之 内二手所聞 網引爲跡

— オホミヤノ ウチマデキコユ アビキスト

網子調流 海人之呼聲

— アゴトノフル アマノヨビコエ

### 第三章 散文

#### 第一節 總說

散  
文  
界  
の  
概  
況

奈良時代に於ける散文の發達は、其の歌謡の發達の顯著なりしに比すれば、甚だ劣りたり。按ずるに、當時朝廷が漢學獎勵の効著く、縉紳の間には、漢文に堪能ある者ありしのみか

散文の種類

は、朝廷の記録、制令の類は云ふまでもなく、庶民に告示する詔勅さへ、漢文にて書かるゝ傾向ありき。されば、特に漢文にて述べがたき場合の外、國語のまゝを寫せる文章の等閑に附せられたるは、自然の勢なり。されども、其の内容に至りては、人智の發達と共に進歩の著かりしこと論なし。此の時代の散文には、祝詞、宣命、國史及び風土記、氏文の類あり。此の中、祝詞は前代に見えたること著き相違なきによりて、こゝには、宣命「古事記」風土記（附氏文）の三部に分ちて、之を叙すべし。

#### 第二節 宣命

宣命

宣命とは、漢文の詔勅に對して、國語にて綴れる勅語の謂なり。今に残れるは、持統天皇以後の朝廷に用ゐられたるものにて、續日本紀の中に見えたり。上代の勅語も、定めて皆此の



其の作者

宣命の文なりけむを『日本書紀』に載するに當りて、悉く漢文に翻譯したるは惜しむべし。宣命の作者は、何人ありしか詳かならねど、中務省なる大内記の起草せしものなりといふ。其の文簡易を旨としたれど、後には漢語梵語を交へて佶屈なるものあるに至りぬ。聖武天皇以後のもの殊に然り。

其の文體

宣命の文詞は、上代より傳はれるを其のまゝに採用して殆ど定式のものごありたるもあり、或は取捨改削して時の便宜に従ひたるもあるべし。就れも措辭の上に種々の修飾を施して、節調の妙あらゝめむご力めたること、おほ祝詞の歌謳に類するが如し。彼は神前に告白する詞にて、此は庶民に宣りきかする詞なれども、共に對者をして感動せしむるを目的ごすればなり。故に、宣命の文にも、對句、疊語、枕詞等修飾ごなるべき語を用ゐたるもの少からず。

其の書き方

宣命の書き方は、祝詞が漢字もて國語を寫せるご稍おなじく、漢字の正訓を用ゐ、且つ讀み易からしめむために、助辭及び用言の語尾を細書せり。世に之を宣命書ご稱へて、前に見えたる萬葉書ご區別す。

文武天皇即位の詔

現御神止大八嶋國所知天皇  
大命<sup>其麻</sup>詔大命乎集侍皇子  
等王臣百官人等天下公民諸  
聞食止詔高天原用事始而遠  
天皇祖御世中今至<sup>麻豆</sup>天皇  
御子之阿禮坐<sup>牟彌</sup>繼繼<sup>用大</sup>  
八嶋國將知次止天都神乃御  
子隨母天坐神之依之奉之隨  
聞看來此天津日嗣高御座之

アキツミカミトオホヤシマクニシロシメス、  
スメラガオホミコトラマト、ノリタマフオ  
ホミコトラ、ウコナハレルミコタチ、オホ  
キミタチ、オミタチ、モ、ノツカサノヒト  
タチ、アメノシタノオホミタカラ、モロ、  
キコシメサヘトノル。タカマノハラニコト  
ハジメテ、トホスメロギノミヨ、ナカ  
イマニイタルマデニ、スメラガミコノアレ  
マサムイヤツギ、ニ、オホヤシマクニシ



業止現御神止大八嶋國所知  
 倭根子天皇命授賜比負賜布  
 貴支高支廣支厚支大命乎受  
 賜利恐坐且此乃食國天下乎  
 調賜比平賜比天下乃公民乎  
 惠賜比撫賜<sup>奉</sup>母止隨神所思行  
 止<sup>佐</sup>久詔天皇大命乎諸聞食止  
 詔是以百官人等四方食國乎  
 治奉止任賜<sup>幣</sup>國國宰等<sup>幣</sup>至  
 麻<sup>豆</sup>天皇朝廷敷賜行賜<sup>幣</sup>國  
 法乎過犯事無久明支淨支直  
 支誠之心以而御稱稱而緩怠  
 事無久務結而仕奉止詔大命  
 乎諸聞食止詔故如此之狀乎  
 聞食悟而歎將仕奉人者其仕

ラサムツギテト、アマツカミノミコナガラ  
 モ、アメニマスカミノヨサシマツリシマニ  
 マ、キコシメシクルコノアマツヒツギタカ  
 ミクラノワザト、アキツミカミトオホヤシ  
 マクニシロシメス、ヤマトネコスメラミコ  
 トノサヅケタマヒ、オホセタマフ、タフト  
 キ、タカキ、ヒロキ、アツキ、オホミコト  
 フウケタマハリ、カシコミマシテ、コノヲ  
 スクニアメノシタヲトノヘタマヒ、タヒ  
 ラゲタマヒ、アメノシタノオホミタカラヲ  
 メグミタマヒ、ナゲタマハムトナモ、カム  
 ナガラオモホシメサクトノリタマフ、ス  
 ラガオホミコトヲモロ<sup>ノ</sup>キコシメサハ  
 ノル。コ、ヲモテ、モ、ノツカサノヒト  
 モ、ヨモノヲスクニヲヲサメマツレトマケ

其の佳作

奉<sup>禮</sup>狀隨品品讚賜上賜治  
 將賜物止詔天皇大命乎諸聞  
 食止詔

タマヘルクニ<sup>ノ</sup>ノミコトモチドモニイタ  
 ルマデニ、スメラガミカドノシキタマヒ、  
 オコナヒタマヘルクニ<sup>ノ</sup>ノリヲ、アヤマチ

オカスコトナク、アカキ、キヨキ、ナホキ、マコトノコ、ロヲモチテ、イヤス、ミス、  
 ミテ、タユミオコダルコトナク、ツトメシマリテ、ツカハマツレトノリタマフ、オホミ  
 コトヲ、モロ<sup>ノ</sup>キコシメサハトノル。カレ、カクノサマヲキコシメシサトリテ、イン  
 シクツカハマツラムヒトハ、ソノツカハマツレラムサマノマニマ、シナ<sup>ノ</sup>ホメタマ  
 ヒ、アゲタマヒ、ヲサメタマハムモノゾトノリタマフ、スメラガオホミコトヲ、モロ  
<sup>ノ</sup>キコシメサハトノル。

此の外、元明、孝謙二帝の即位の宣命さては聖武天皇立后の  
 宣命等見るべきものあり。また、光仁天皇が左大臣藤原永手  
 の薨去を吊ひ給ひし宣命も、世に稱せらる。

第三節 『古事記』



推古天皇の二十八年に、聖德太子蘇我馬子と議して天皇紀、國紀及び臣連伴造百八十部并に公民等の本紀を録し給ひたることあり。是れ正しく我が國修史の舉ありし始なれど、今は殆ど全く亡佚して、其の詳細を知りがたし。されば、今日に傳はれる國史の中にては、元明天皇の和銅五年に太安萬侶が勅を奉じて撰進したる『古事記』を以て最古とす。此の書三卷より成り、我が國の開闢より推古天皇の御代に至る世々の事蹟を叙べたり。是れより先、天武天皇即位の十年、舍人稗田阿禮といふものをして皇位の繼承及び先代の舊事を口授せしめしが、中途にして崩せられしかば、安萬侶即ち阿禮の口授に基きて其の業を完成したるなり。

『古事記』の文は、大方漢文にて書かれたれど、歌謠の類と適當の漢語をき古語とは、皆漢字の音を假りて國語のまゝを

『古事記』の撰進

其の文體

其の書き方

寫したり。故に、此の書き方の主なるものには、(一)専ら漢字の音を假りて寫せるもの、(二)其の訓をも併せ用ゐること、宣命書に類せるもの、(三)文字の排列こそ轉倒して漢文に類すれ、實は我が國語の格と異ならざるもの、(四)文字の排列は勿論語格までも全く漢文に依れるもの、以上四種なり。

其の性質

此の書、元來祝詞宣命など、は其の目的を異にしたれば、叙述の方法實質にして修飾を缺けりと雖も、變化自在にして且つ力あり。之を同時代に成りし漢文の歴史『日本書紀』に比するに、此の文體の雜駁なるところ、或は彼の整然たるに及ばざるが如し。雖も、古傳説を直寫せる點に於いては、遂に此の書を推さざるを得ず。其の記事には、往々奇怪にして實事と認めがたきものあり。雖も、是れなほ或時代の人々が有せし一種の感想として見るを得べし。實に『古事記』は我が



國史學上の一大著述なるのみならず、又國文學上の至寶なり。左に其の景行天皇の條より一節を抄録す。

小碓命(日本武命)熊曾建を誅し給ふ段

故(小碓命)到于熊曾建之家見者於其家邊軍圍三重作室以居於是言勳爲御室樂設備食物故遊行其傍待其樂日爾臨其樂日如童女之髮梳垂其結御髮服其姨之御衣御裳既成童女之姿交立女人中入坐其室內爾熊曾建兄弟二人見感其娘子坐於巳中而盛樂故臨其酣時自懷出劍取熊曾之衣袷以劍自其胸刺通之時其弟

カレ、(ヲウスノミコト)クマソタケルガイヘニイタリテミタマヘバ、ソノイヘノホトリニ、イクサミヘニカクミ、ムロヲツクリテゾフリケル。コ、ニ、ニヒムロウタゲセムトイヒトヨミテ、ヲシモノヲマケソナヘタリキ。カレ、ソノアタリヲアルキテ、ソノウタゲスルヒヲマチタマヒキ。コ、ニ、ソノウタゲノヒニナリテ、ソノユハセルミカミヲ、ヲトメノカミノゴト、ケヅリタレ、ソノミヲバノミソミモラケシテ、スデニヲトメノスガタニナリテ、ヲミナドモノナカ

建見畏逃出自追至其室之椅本取其背皮劍自尻刺通爾其熊曾建自言莫動其刀僕有白言爾暫許押伏於是自言汝命者誰爾詔吾者坐纏向之日代宮所知大八島國大帶日子淤斯呂和氣天皇之御子名倭男其那王者也意禮熊曾建二人不伏無禮聞看而取殺意禮詔而遣爾其熊曾建自信然也於西方除吾二人無建強人然於大倭國益吾二人而建男者坐祁理是以吾獻御名自今以後應稱倭建御子是事自訖即如熟瓜振拆而殺也故自其時稱

ニマジリタチテ、ソノムロヌチニイリマシキ。コ、ニ、クマソタケル、アニオトフタリ、ソノヲトメヲミメデ、オノガナカニマセテ、サカリニウタゲタリ。カレ、ソノタケナハナルトキニ、ミフトコロヨリダチライダシ、クマソガコロモノクビヲトリテ、タチモテソノムネヨリサシトホシタマフトキニ、ソノオトタケル、ミカシコミテ、ニゲイデキ。スナハチ、ソノムロノハシノモトニオヒイタリテ、ソノセヲトラヘ、タチモテシリヨリサシトホシタマヒキ。コ、ニ、ソノクマソタケルマヲシツラク、ソノミタチヲナウゴカシタマヒソ。ワレマヲスベキコトアリトマヲス。カレ、シマシユルシテ、オシフセタマフ。コ、ニマヲシツラク、ナ



御名謂倭建命

ガミコトハタレニマスゾ。アハ、マキムク

ノヒシロノミヤニマシ〜テ、オホヤシマクニシロシメス、オホタラシヒコオシロワケ  
ノスメラミコトノミコ、ミナハヤマトヲグナノミコニマス。オレクマソタケルフタリ、  
マツロハズ、キヤナシトキコシメシテ、オレヲトレトノリタマヒテ、ツカハセリトノリ  
タマヒキ。コ、ニ、ソノクマソタケル、マコトニシカマサム。ニシノカタニ、アレフ  
タリヲオキテ、タケクコハキヒトナシ。シカルニ、オホヤマトノクニニ、アレフタリ  
ニマシテ、タケキヲハイマシケリ。コ、ヲモテ、アレミナヲタマツラム。イマヨリ  
ノチ、ヤマトタケノミコトタ、ヘマラスベシト、マヲシキ。コノコトマヲシヲヘツレ  
バ、ホヅチノゴトフリサキテ、コロシタマヒキ。カレ、ソノトキヨリゾ、ミナヲタ、  
ヘテ、ヤマトタケノミコトトハマヲシケル。

『古事記』の成りし後八年を経て、養老四年に舍人親王等、日本書紀を撰進せり。此は『古事記』の漢文體ならざるを憾み、更に漢土の國史に倣ひ、全く漢文にて作られたるなり。爾後勅撰の歴史はすべて此の例に據ることゝなりき。

第四節 風土記 附氏文

風土記の撰進

元明天皇の和銅六年五月、畿内并に七道の諸國に令して、郡郷の名に好字を附せしめ、又其の郡内に生ずる産物の品目を録し、及び土地の沃墾、山川原野の名號の由來、又古來相傳ふる舊聞異事を記載して、上らしめたる事ありき。此の令に應じて諸國より奉りしものを風土記と言ふ。此は地誌の類にして、傍ら其の國々の歴史を兼ねたるものあり。當時は諸國より奉りたる風土記も許多ありけむを、今は亡佚して、殘れるは僅に數部に過ぎず。其の中、最も古きは『播磨風土記』にして、それより稍後なるは常陸、出雲の風土記なり。丹後、肥前、豊後の風土記、亦出雲と同じ頃に成れるにや、其の體裁畧似たり。此の中、『出雲風土記』は缺くる所無けれども、他は缺本又は

『播磨風土記』



風土記の文體

其の記事

其の作者

抄録本にて傳はれり。其の外『筑紫風土記』『土佐風土記』等の名稱も、『萬葉集』の古註等に散見したれども、皆逸文なり。風土記は各國より別々に撰進せしものなれば、文體もおのづから等しからねど、大方は漢文體に書かれたり。其の中、古老の舊聞を録せるあたりは、國語のまゝを寫したるもあり。此の點より云へば、其の文體は多少『古事記』に類せり。書中の記事は、物名等を列ねたる部分多きが故に、概しては無味乾燥にして殆ど文學上の價値なき程なり。而して又、古傳に屬せる記事は、往々怪異に過ぎて、今日の人には信じがたきこと少からず。作者は孰れも詳かならず。次に掲ぐるは、『出雲風土記』なる國引の故事を記せる一節なり。

國引の段

所以號意字者國引坐八東水一オウトナヅクルユエハ、クニヒキマセルヤ

臣津野命詔八雲立出雲國者  
 狹布之稚國在哉初國小所作  
 故將作縫詔而栲衾志羅紀乃  
 三埼矣國之餘有耶見者國之  
 餘有詔而童女胷鈕所取而大  
 魚之支太衝別而波多須々支  
 穗振別而三自之綱打挂而霜  
 黑葛閉々那々爾河船之毛々  
 會々呂々爾國々來々引來縫  
 國者自去豆乃打絶而八穗爾  
 支豆支乃御埼也此而堅立加  
 志者石見國與出雲國之堺有  
 名佐比賣山是也……………  
 ……………亦高志之都々  
 乃三埼矣國之餘有耶見者國

ツカミヅオミツヌノミコトノノリタマハク、  
 ヤクモタツイヅモノクニハ、サヌノワカク  
 ニナルカモ。ハツクニチヒサクツクラセリ。  
 カレツクリヌハムトノリタマヒテ、タクブ  
 スマシラキノミサキラ、クニノアマリアリ  
 ヤトミレバ、クニノアマリアリトノリタマ  
 ヒテ、ヲトメノムナスキトラシテ、オホヲ  
 ノキダツキワケテ、ハタス、キホフリワケ  
 テ、ミツヨリノツナウチカケテ、シモツバ  
 ラヘナヘナニ、カハフネノモンロモソロニ、  
 クニコクニコトヒキキヌヘルクニハ、コヅ  
 ノウチタエヨリシテヤホニキツキノミサキ  
 ナリ。カクテ、カタメタテシカシハ、イハ  
 ミノクニトイヅモノクニトノサカヒナルナ  
 ハサヒメヤマコレナリ。……………



之餘有詔而童女曾祖所取而  
 大魚之支太衝別而波多須々  
 支穗振別而三自之綱打挂而  
 霜黑葛閉々那々爾河船之毛  
 々曾々呂々爾國々來々引來  
 縫國者三穗之琦也持引綱者  
 夜見島是也固堅立加志者有  
 伯耆國大神岳是也今者國引  
 訖詔而意宇杜爾御杖衝立而  
 意惠登詔故云意宇

ケコレナリ。イマハクニヒキヲヘストノリタマヒテ、オウノモリニミツエツキタテテ、  
 オエトノリタマヒキ。カレオウトイフ。

氏文

其の頃、また氏文といふものあり。一家族の歴史ごもいふべきものにて、祖先の功業及び家系を録したり。其の書き方は、

漢文の中に國語を寫せる假字を混用し、別に助辭を細書せるなど、恰も『古事記』の文と宣命書とを兼ねたるが如し。氏文の中、今日に傳はれるは高橋氏文のみにて、餘は悉く散佚せり。



## 第三編 平安時代の文學

## 第壹章 總論

平安時代の  
範圍

平安時代とは、桓武天皇延暦十三年に都を平安に奠め給ひし時より、後鳥羽天皇の文治二年に將軍源賴朝覇府を鎌倉に開きて、政權全く武門に歸せし頃までを云ふ。其の間凡そ三十二代四百餘年なり。

本期の漢學

本期の初には、歴代の天皇意を用ゐて漢學を獎勵し、朝紳また私學館を設けて其の子弟に漢學を教へしめしかば、斯學の隆盛は其の頂點に達したり。當時、詩文を能くせしもの少からず。僧空海、小野篁、都良香、菅原道真、三善清行等殊に名高し。漢文の書籍には、勅撰の歴史に『續日本紀』、『日本後紀』、『續日本後紀』、『文德實錄』、『三代實錄』等あり。『日本書紀』に加へて『本

國文學の復  
興

朝六國史』と稱せらるゝもの、史學上重要な書なり。詩文集には、『經國集』、『凌雲集』、『文華秀麗集』、『都氏文集』、『菅家文章』、『本朝文粹』等名高し。其の他、『古語拾遺』、『大同本紀』、『弘仁格式』、『新撰姓氏錄』、『令義解』、『貞觀格式』、『延喜格式』等の書出でたり。

然るに、醍醐天皇の頃に至り、遣唐使廢せられて、漢學稍衰微の兆あるに及び、是れまで潜まり居たりし國文學次第に勢力を得、物語、草子、日記、紀行等の如き各種の散文あらはれ、今様、神樂、催馬樂等の如き異様なる歌謠も出でたり。而して、是等の多數は、朝紳若しくは宮媛の手に成りしが、さらぬものも浮華、驕奢ある時世の感化を承けたれば、總じて艷麗、優美の姿を具へ、雄渾、壯大の氣に乏しかりき。

漢學佛敎の思想は、本期に於いて、著く我が固有の思想と調和して、此の文學の内容を豊富ならしめたり。

其の内容



言語は、また奈良時代の後を承け、漢學佛教の流行につれて、外國語の混交漸く多きを致せり。是等は、最初は其の音韻の我が國語に調和すべきかぎりを採りたりしが、其の輸入愈多くなるに従ひ、此方よりも亦調和すべき必要ありて、自然に國語の音韻及び組織の上に多少の變化を生ずるに至りぬ。

奈良時代の末に片假名の發明ありしことは既に述べたり。然るに、此の期の初に至りて、また平假名作出せられぬ。是は元來漢字の草體より出でたるものなるが、嵯峨天皇の頃僧空海が、いろは歌を作るに至りて始めて一定せり。但し、此の二種の國字が文學上に實効をあらはし、は、醍醐天皇の御宇以後にあり。從來我が國文學は漢字にて書かれたるものゝみなりしが、今や全く假名のみので文章をも見るに至りぬ。

漢字を聲字として國語を寫したるに比すれば、眞に一大進歩と謂ふべし。是れより我が國民は永く此の二種の假名と漢字とを併せ用ゐることゝなれり。

## 第二章 歌謠

### 第一節 總說

本期の初凡そ七八十年の間は、我が國に於ける漢文學極盛の時期にして、殊に嵯峨天皇の御宇などには、大學ある紀傳道の學生等が試験にも、専ら詩賦を課したる程ありしかば、上下を舉げて詩を賦し漢文を作ること盛に行はれぬ。然れども、かゝる中にも反動の勢は早く清和天皇の朝より現はれつゝ、遂に和歌復興の機運に會しぬ。此の機運に先驅せし



## 歌合

主なる歌人を僧遍照文屋康秀僧喜撰、小野小町、在原業平、大伴黒主等とす。これ世に六歌仙と稱せらるゝ人々なり。宇多天皇の寛平の頃より和歌の道益興り、公卿宮媛の間には歌合といふもの頻りに行はれたり。是は歌人等相集り、題を設けて即座に歌を作り、之を品評して優劣を判するものなり。されば、此の頃より詠歌の盛になりたることは云ふまでもなけれども、かゝる遊戯的諷詠の行はるゝに従ひ、其の風調は事物に觸れて實感を歌へる從來の歌謠に比べて、いたく異様のものとなりぬ。此の際、また長歌衰へて短歌獨り榮ゆるに至れり。而も短歌はさすがに工夫を凝らし巧を競ひたる程ありて、藝術としては明かに一步を進めたり。然れども、古歌の雄壯實實なりしには似て、輕佻浮華の風あり。さて、醍醐天皇の朝よりは和歌一層盛に行はれ、名匠夥しく

## 長歌の衰微

## 短歌の進歩

## 朝廷の和歌

## 奨励

## 勅撰の歌集

## 私撰の歌集

## 連歌

## 今様歌

現はれしが、天皇深く意を此の道に注がせ給ひて、『古今和歌集』を撰はしめ給へり。是れ勅撰歌集の始なり。次いで、村上天皇は、和歌所を禁中の梨壺に設け、時の歌人をして、『萬葉集』の訓點を附せしめ、また、『後撰和歌集』を撰はしめ給へり。以後、本期間に勅撰歌集の撰進せられしもの、五部あり。此の外に、私撰の歌集も亦尠からず。紀貫之の『新撰和歌集』、藤原清輔の『續詞華集』、藤原公任の『金玉集』等、殊に有名なり。かく和歌の盛行するに従ひて、旋頭歌及び連歌等異體のものも多くなりぬ。當時連歌は席上の頓作を旨とし、漢語をも俗語をも憚からず用たり。また、今様の歌といふものも此の時代より多くなりたり。今様とは、既に其の名目の示す如く、姿も詞も古に泥まぬ歌にいふ意にて、七五音の聯句四節より成るもの、是れはた時俗の言語をも外國語をも混用す



神樂歌  
催馬樂  
朗詠

第三編 平安時代の文學

五八

ることを嫌はざりき。其他、神祇を祝へる神樂歌あり、俗謠を唐樂の譜節に合せて謳へる催馬樂あり、詩賦に曲節を附して吟ずる朗詠といふものありき。但し、是等は眼に見るものよりは耳に聽くを専らせざるものにて、所謂歌曲に屬せり。されば、催馬樂朗詠今様等は當時總稱して郢曲とも唱歌とも呼ばれぬ。今こゝに一二の例を示さむ。

庭燎 (神樂歌)

深山には 深山には 霞降るらし 外山なる 眞柄のかつら 色つきにけり 色つきにけり

鷹の子 (催馬樂)

鷹の子は まろにたうばらむや 手に据ゑて 粟津の原の 御栗栖のめぐりの鴉 取らさむや ささんだちや

蓬萊山 (今様)

蓬萊山には 千歳ふる 萬歳千秋 重なれり 松の枝には 鶴巢くひ

和歌の衰運

巖の上には 龜遊ぶ

歌の方式

かくて、歌はますます進みたるに似たれど、其の實末技に流れて、名作次第に減少せり。殊に、此の時代の中頃より、詠歌を教ふる書籍出で、各門戸を立て、一定の方式を固守するに及びては、歌は模型にて従ひ製作する一種の機械的技術の如きものとなりぬ。藤原公任の『新撰髓腦』、源俊賴の『山木髓腦』、『無名抄』、藤原基俊の『悅目抄』、藤原清輔の『奥儀抄』、『袋草子』等は、即ち此の種の書籍なり。

其の書籍

第二節 『古今和歌集』

『古今和歌集』

『古今和歌集』は、醍醐天皇の延喜五年に、紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑に仰せて撰ばしめ給ひたるものなり。此の集は、『萬葉集』に入らざる古歌、其の以後の名歌及び編者等の

第二章 歌謡 第一節 總説 第二節 『古今和歌集』

五九



## 歌想

自詠を撰びて、其の卷二十、四季、賀、離別、羈旅、物名、戀、哀傷、長歌、旋頭歌、俳諧歌、大歌所等の部門に分ち、歌の数は千百首に滿ちたり。此の集の中には、漢學、佛教の思想を表現せるもの少からず、而して、『萬葉集』にありては、是等の思想を詠ぜしもの、大方直譯めきて露骨なるを免れざりしに、此の集にありては、能く其の意を翻して斧鑿の痕跡を止むることなし。また、『萬葉集』をして異彩あらしめたる敬神、忠君の念の如き、此の集にては稍形式的に流れたる觀あり。雖も、其の鬱勃たる氣概はなほ尋ぬべし。さて、此の集にて最も多き歌は、雪月花等の景物を詠せるもの、若しくは男女相思の情を抒へたるものなり。而して、其の景物を歌へるもの、多數は、長閑ある風調を帶ぶ。雖も、花を見て人生のはかなきを嘆ち、月を見て無常を感ずるが如きものあるは、即ち佛教思想の影響

## 歌題

## 萬葉歌との比較

## 『古今和歌集』中の歌人

## 在原業平

ならむ。此の集の歌想が『萬葉集』に比へて濃密、複雑となり、歌語が優美、艷麗に赴きしことは、亦特に注意すべきことなり。此の集に見えたる歌人の数は甚だ多し。彼の六歌仙をはじめ、在原行平、素性法師、伊勢、さては紀貫之、紀友則、凡河内躬恒、壬生忠岑等は、其の主なるものにして、業平と貫之とは特に拔群と稱せらる。

在原業平（一四八五—一五四〇）は、嵯峨天皇の皇子阿保親王の第五子なりき。天長三年父親王の奏請によりて、兄の行平と共に在原の姓を賜はりて、人臣の列に降りぬ。官に仕へて近衛權中將たりしかば、世に在五中將と呼べり。業平容姿頗る閑雅、壯時は放縱にして操行修らざりき。或は曰はく、當時藤原氏の驕慢甚だしかりしを憂憤して、此に出でたるなり。其の歌は、餘韻深く艷麗なれども、壯大の感あるは少し。



題しらす

大方は 月をもめでし これぞこの つもれば人の おいとなるもの  
二條の後の宮の御息所と申しける時に、御屏風に龍田川に紅葉  
流れたるかたを書けりけるを題にてよめる

ちはやふる 神代もきかず 龍田川 からくれなるに 水くゝるとは  
布引の漉のもとにて人々あつまりて歌よみける時によめる

ぬきみだる 人こそあるらし 白玉の まなくも散るか 袖のせばきに

紀貫之

紀貫之(一五四二—一六〇六)は、歌人望行の子にして、碩學長  
谷雄の孫なりき。延喜年中御書所預となり、其の後諸官を經  
て土佐守となり、次いで木工權頭に遷り、從四位下に叙せら  
れたり。延喜五年、勅を奉じて、躬恒等と『古今和歌集』を撰びた  
るよしは、既に讀者の知る所なるべし。此の外の撰述に『新撰  
和歌集』等あり。貫之は漢學に通じ、又文武の吏才ありしが、文  
壇に於ける聲名は最も不朽のものたり。即ち、散文に、假名文



在原業平

紀貫之



の一體を創始して、將來に於ける斯文の發達を導き、歌謡に、『古今集』の編纂を擔當して、既往幾十年の衰廢を興し、は、共に千古の偉業を謂ふべし。貫之の歌は、風格流麗にして變化に富むのみならず、至誠の情中に籠りて、誦者の同感を誘ふに足る。其の散文につきては、『土佐日記』并に『古今集』の序最も名高し。

歌奉れと仰せられし時によみて奉れる

さくら花 咲きにけらしな おしびきの 山のかひより 見ゆる白雲

延喜の御時歌合しける

はるがすみ たなびきにけり ひさかたの 月の桂も 花やさくらむ

八月駒迎

あふさかの 關のしみづに かげ見えて 今や引くらむ 望月のこま

左に前記以外の歌人の詠數首を擧ぐ。

題しらす

小野小町



いろみえで うつろふものは 世の中の 人の心の 花にぞありける

題しらす

僧 正 遍 照

末のつゆ 本のしづくや 世の中の おくれさきだつ たゆしなるらむ

題しらす

在 原 行 平

はるのさる 霞のころも ぬきを薄み 山風にこそ みだるべらなれ

二條後の東宮の御息所ときこねける時、正月三日御前に召して

仰せことある間に、日は照りながら雪の頭に降りかゝりけるを

よませ給ひける

文 屋 康 秀

春の日の 光にあたる われなれど かしらの雪と なるぞわびしき

題しらす

大 伴 黒 主

春雨の ふるはなみだか さくら花 ちるを惜しまぬ 人しなれば

題しらす

喜 撰 法 師

わがやどは 都のたつみ しかぞすむ 世をうぢ山と 人はいふなり

櫻の花の散り侍りけるを見て

素 性 法 師

花ちらす 風のやどりは たれかする 我にをしへよ 行きて恨みむ

雪の降れるを見てよめる

紀 友 則

雪降れば 木ごとに花ぞ 咲きにける いづれを梅と わきて折らまし

なが月のつごもりの日よめる

凡 河 内 躬 恒

道知らば たづねても行かむ もみぢ葉を ぬさと手向けて 秋は往にけり

家を賣りてよめる

伊 勢

あすか川 淵にもわらぬ わが宿も 瀬にかはり行く ものにぞありける

あひまれりける人の住吉にまうでけるによみてつかはしける

壬 生 忠 岑

住吉と あまは告ぐとも 長居すな 人忘れ草 おふといふなり

第三節 『古今集』以後の勅撰歌集

『後撰和歌集』

『古今集』の成りてより四十六年を経て、村上天皇の天曆五年に、新に成れる歌集を『後撰和歌集』といふ。是は、同天皇が源順、大中臣能宣、清原元輔、紀時文、阪上望城の五人をして『萬葉

第二章 歌謡 第三節 『古今集』以後の勅撰歌集



集』の訓點を考定せしめし序に撰ばしめ給ひたるなり。此の集は『古今集』時代並に其の以後の歌を載せたれど、尙ほ上代に溯りて古歌を採れるもあり。卷數は二十、部門の類別は、『古今集』におなじく、只其の數項を缺けるのみ。此の集以下の撰集皆之と大同小異なり。集中の主なる歌人は『古今集』に見えたると殆ど相同じ。然れども、撰擇の主旨、歌の姿を問はずして其の心をのみ重んじたるが故に、『古今集』の姿情兼備せるに比べては劣りぬべし。後撰集』と其の撰擇の方針全く相反して、而も『古今集』に及ばざるを『拾遺集』とす。

## 『拾遺集』

此は、一條天皇の御宇に藤原公任の撰べるなりとも、或は花山法皇の御撰なりともいへり。此の集は、専ら前の二集に入らざる歌を採りたれども、其の撰擇精しからず、且つ姿を先こせるが故に、意義淺薄にして餘韻無き歌多し。『古今集』後撰

## 『三代集』

## 『拾遺集』以後の勅撰歌集

と此の『拾遺集』を併せて、世に『三代和歌集』と云ふ。

『拾遺集』の撰ばれて後九十年許りにして、藤原通俊『後拾遺和歌集』を上りぬ。其の歌の風は、次第に古調を離れて卑俗に陥らむとするもの多し。『後拾遺』の後四十餘年を経て、源俊賴『金葉和歌集』を撰び、又二十餘年を経て、藤原顯輔『詞華集』を上り、又四十餘年を経て、藤原俊成『千載集』を撰びぬ。『古今集』以後の歌集を比較すれば、『後撰』は質に富みて文に乏しく、『拾遺』は華に過ぎて實少く、又『後拾遺』は卑俗にして、『金葉』、『詞華』は纖巧に流れたり。『千載集』は文質中を得たるに近し。

## 其の長短

## 『古今集』以後の歌人

『古今集』以後の歌集に見えたる歌人にして、特に其の名を録すべきは、大中臣能宣、源順、平兼盛、曾根好忠、清原元輔、藤原公任、源經信、大江匡房、源俊賴、藤原顯輔、同基俊、同俊成、源賴政、紫式部、清少納言、和泉式部、赤染衛門、相摸大貳三位等の十數



藤原公任

人さす。此の中、公任、俊頼、俊成の三人殊に傑出せり。藤原公任(一六二七—一七〇一)は、小野宮太政大臣實頼の孫なり。世に四條大納言といへり。人さ爲り聰明にして、學和漢を兼ね、諸藝一さして通ぜざるなく、詠歌及び筆跡特に其の長技たり。其の歌は、姿優しくして、奇想の中に風韻を存せり。著書に『北山鈔』、『和歌朗詠集』、『新撰髓腦』等あり。家集世に傳はれり。

兵部卿の宮にて月待つ心を

月かげの 出ぬ程だに あるものを 人待つ宿を 思ひこそやれ

春白河に殿上の人々いきたりけるに

春來てぞ 人もとひける 山里は 花こそ宿の あるとなりけれ

有國の大貳の筑紫に下るに

わかれより 増りてをしき 命かな 君にふたゝび おはむと思へば

源俊頼

源俊頼(一七七〇前後)は、公任と時代を同じうしたる經信の

子なり。堀河、鳥羽、崇徳の三帝に歴仕し、從四位上右近衛少將となりき。其の歌を詠ずるには、熟考の上更に改削して、初めて人に示したりといふ。着想新奇、詞姿頗る温雅なり。其の著述に『山木髓腦』、『無名鈔』等あり。家集を『散木棄歌集』といふ。

薄

うづら鳴く 眞野の入江の はま風に をばな波よる 秋の夕ぐれ

堀川院の御時、百首の歌奉りける時、別の心をよみ侍りける

忘るなよ かへる山路に あとたねて 日数は雪の ふりつもるとも

尋花日暮といへる心をよめる

暮れはてぬ かへさは送れ 山ざくら 誰が爲に來て まどふとか知る

藤原俊成

藤原俊成(一七七三—一八六四)は、御堂關白道長が四世の孫なり。諸官を経て皇太皇宮大夫となり、六十二歳の時髪を削りて釋阿と號しき。歌調穩かにして旨深く、詞姿整ひて粗雜の風なし。後鳥羽上皇深く俊成を愛し、終に和歌所の所領を

第二章 歌謡 第三節 『古今集』以後の勅撰歌集



賜ひ、且つ子孫をして永く相續がしめ給ひき。後世の所謂和歌の師範家の祖なり。歌學の書に『古來風躰抄』の著あり。家集を『長秋詠草』といふ。

攝政太政大臣家五十首歌よみ侍りけるに

ゆふされば 野邊の秋風 身にしみて うづら鳴くなり 深草のさと

述懐百首の歌よみ侍りける時鹿の歌とてよめる

世の中よ 道こそなけれ 思ひ入る 山の奥にも 鹿を鳴くなる

題知らず

駒とめて なほ水かはむ 山ぶきの 花のつゆ添ふ 井出の玉川

尚ほ本期の歌人中有名なる者の詠數首を掲ぐ。

題知らず

大中臣能宣

紅葉せぬ ときはの山は 吹く風の おとにや秋を きくわたるらむ

屏風に八月十五夜池ある家に人遊びたる所

源 順



藤原公任

藤原俊成



水の面に てる月なみを 数ふれば こよひぞ秋の 最中なりける

清慎公五十賀し侍りける時の屏風に 清 原 元 輔

青柳の みせりの糸を くりかへし いくらばかりの 春を経ぬらむ

題知らず 源 經 信

君がよは つきじとぞ思ふ かみ風や みもすそ川の すまむかざりは

題しらす 紫 式 部

世の中を なになげかまし 山ざくら 花見るほせの 心なりせば

月のあかゝりける夜まうで來たりける男の、立ちながら歸りに

ければ、朝にいひ遣はしける 和 泉 式 部

涙さへ いでにしかたを ながめつゝ、こゝろにもあらぬ 月を見しかな

宇治前太政大臣家に、三十講の後、歌合し侍りけるに、

五月雨をよめる 相 模

五月雨は みつのみ牧の ま菰草 かりほすひまも あらじとぞ思ふ

新院の御前にて、花契還年といへる事をよめる

藤 原 顯 輔



よろづ代に 見るべき花の 色なれど けふのはひの いつか忘れむ

堀河院の御時百首歌奉りける時早蕨を 藤原基俊

みやま木の かげのゝ下の 下わらび もえいづれども 知る人もなし

歌林苑にて人々花の歌よみ侍りしに 源頼政

花咲かば 告げよといひし 山もりの 來る音すなり 馬に鞍おけ

### 第三章 散文

#### 第一節 總説

散文界の概況

本期の初に於ける漢文學の流行は、散文の上にも影響して、祝詞宣命の如きも、次第に國文の格を離るゝに至りしが、其の後漢文學の獎勵止み、國字の便利認めらるゝに及びて、假

假名文出づ

名書きの文章世に出づることとなりぬ。蓋し、日用の記録などには早くより假名もて書くことも行はれたらむと思はるれど、始めて文章の體裁を備へて世に公にせられ、現に今日にも傳はれるは、『竹取物語』『伊勢物語』『古今和歌集』の序、『土佐日記』等なり。是等は、大方醍醐天皇の朝の前後に出でたるものなれば、恰も歌謡の再興と時を同じうせり。かくて、諸種の物語相次ぎて世に出でしが、其の中、今に遺れるは、『宇津保物語』『落窪物語』等あり。孰れも想像を馳せ意匠を凝らして架空の事實を面白く仕組みたる説話なり。されば、從來専ら實用をのみ目的とせし散文も、今や美術的方面に其の領域を擴めむとす。誠に一大進歩と謂ふべし。此の頃、又『蜻蛉日記』といふもの出でたり。假名の消息文も、また此の頃より漢文體の書牘と並びて行はれ始めぬ。是は云ふまでもなく實用一

物語

消息文



遍のものなるべき筈なれど、實際は和歌の序詞めきたる文體多くして、文學的趣味を帯びたり。其の後、數世を経て一條天皇の頃よりは、散文の發達著く、紫式部、清少納言、藤原爲業、中山忠親等の大家陸續としてあらはれ、小説、雜史、日記、紀行等に其の筆を揮ひたり。

## 散文時代

平安時代は、かくの如く諸種の散文一時に發達して各、其の榮を極めたりしかば、奈良の和歌時代に對して散文時代の稱あり。今日單に和文と云へば、殆ど本期の散文にかぎれるが如き觀あるにても、其の文學が特に散文に秀でたりしを知るに足るべし。

今、本期の散文を叙説するに當りては、其の性質體裁より分類して、小説、歌序、日記及び紀行、隨筆、雜史の五種に分たむ。

## 散文の類別

## 第二節 小説

## 『竹取物語』

小説の中にて最も古きを『竹取物語』とす。此の書は、延喜の後久しからざる程に成りしものと言ひ傳へたれど、作者詳かならず。皇族大臣などいふ高貴の人々が、月界より下りし一美女を娶らむとて、奔走勞苦する狀を寫したる滑稽小説にて、間々事件を漢籍及び佛經中の記事に借れり。章句の簡單なる點は、祝詞、宣命の風ありて、おのづから古文の趣を具へたり。

## 燕の子安貝

日暮れぬれば、かの寮におはして見給ふに、まことに燕巢作り、くらつ麻申すやうに尾をさゝげて廻るに、荒籠に人を載せて釣り上げさせて、燕の巢に手をさし入れさせて探るに、物もなしと申すに、中納言、惡しく探れば、なきなりと腹立ちて、誰ばかりおぼえむにとて、われ上りて探らむと宣ひ



て籠にのりて上りて、窺ひ給へるに、燕尾をさゝげていたく廻るに合せて、手をさゝげて探り給ふに、手にひらめけるものさはる時に、われ物握りたり。今はおろしてよ、翁しねたりと宣ひて、集りてとくねろさむとて、綱を引きさすぐして綱絶ゆる、即ちやしまの鼎の上のけさまに落ち給へり。人々あさましがりて、寄りて抱へ奉れり。御目はしらめにて伏し給へり。人々御口に水をすくひ入れ奉る。辛うじていき出で給へる。また鼎の上より手とり足とりしてさげおろし奉る。からうじて、御心地いかおぼさると問へば、息の下にて、ものは少し覺ゆれど、腰なむ動かれぬ。されど、子安貝をよど握りもたれば、嬉しく覺ゆるなり。まづ脂燭さして來、此の貝顔みむと、御ぐしもたけて、御手をひろげ給へるに、燕のまりたける古囊を握り給へるなりけり。それを見給ひて、あなかひなのわざやと宣ひけるよりぞ、思ふに違ふことをば、かひなしといひける。

## 『伊勢物語』

『竹取』に次ぎて『伊勢物語』出でぬ。此の書は、全篇を一貫したる仕組あるにあらず、和歌の序詞めきたる文章もて簡單な

## 『大和物語』

る數多の事件を記したるものにて、每章結ぶに歌を以てせり。卷中の事件は大方在原業平の閱歴めきたれど、虚實を錯へ、前後を序せず、専ら戀愛の事にかゝりぬ。其の特色は、文章の簡潔にして力強く、餘情に富むにあり。後に出でたる『大和物語』は全く此の書の體裁に倣へるなり。

## 六條わたり

昔左のおほいまうちぎみいませそかりけり。加茂川のほとりに、六條わたりに家をいとたもしろく作りて住ひけり。かみな月のつごもりがた、菊の花うつろへるさかり、紅葉の千ぐさ見ゆるなり。御子たちおはしまさせて、夜ひと夜、酒飲みあそびて、夜あけてゆくほどに、此のおもしろきをほむる歌よむ。そこにありけるかたわおきな、板敷の下にはひありきて、人に皆よませはてゝ詠める、

しほがまに　いつか來にけむ　朝なぎに　つりする舟は　こゝに寄らなむ  
となむ詠みける。陸奥の國に行きけるに、あやしくおもしろきところへ



多かりけり。わがみかど六十餘國の中に、鹽竈といふ處に似たるところなかりけり。さればなむ彼の翁、さらに此處をめで、しはがまにいつか來にけむとは詠めるなり。

『住吉物語』  
『宇津保物語』

『伊勢』に次ぎて世に出でたりと言ひ傳ふるは『住吉物語』と『宇津保物語』となり。但し、今世に存する『住吉物語』は、全く後人の偽作にかゝれり。『落窪物語』、『濱松中納言物語』、『堤中納言物語』等の出でたるも、亦此の頃の前後なり。是等は皆作者を詳かにせず。

『落窪物語』  
『濱松中納言物語』  
『堤中納言物語』

要するに、此の頃の物語には、文章の外、別に精細なる攷究の値あるものなかりき。然れども、我が小説はかゝる状態より起りたりと思へば、決して輕々に看過すべきにあらず。況や、今日までも有数の大作として認めらるる『源氏物語』はかゝる搖籃中に生長したるものなりしをや。『源氏物語』の著者は

『源氏物語』

紫式部

紫式部なり。

紫式部(一六五〇前後)は、漢學者として名ありし藤原爲時の女にして、藤原宣孝の室ありき。幼にして、穎敏強記、甚だ學問を好みしが、長ずるに及びて博覽衆に超え、我が國の小説日記、歌集の類は更なり、經史佛書に至るまで、一も通曉せざるこゝなかりき。おもふに、彼が後年の傑作は、もこより天稟の才に依れり。雖も、讀書勉學の効また與りて力ありしこゝ疑無し。所傳に依れば、式部は當時の士女が浮靡なりしに似ず、謹慎にして婦徳を具へたりといふ。夫、宣孝の卒せし後は、其の女と共に閑居せしが、やがて一條天皇の中宮上東門院彰子に仕へて、侍講など務めたるこゝあり。其の女賢子は、世に大貳三位と稱する、閨秀なり。

『源氏物語』

紫式部が『源氏物語』を著はし、時代は、長保寛弘の間、式部が



著作の時代  
『源氏物語』  
の結構

二段に分る

『宇治十帖』

閑居してありける頃ならむといふ。此の物語は、主人公たる源氏の君と其の子薫大將とが宮中の生涯を敘せるものにて、帝王三代の間に亘り、桐壺帝、木空蟬、夕顔、若紫等すべて五十四篇より成れる大作なり。然れども、大體よりいふときは、其の結構二段に分かるべし。即ち前なる四十四篇は専ら源氏の君と紫の上とを骨子として、之に許多の人物と事變とを配合し、後の十篇は其の子薫大將及び匂宮を以て男主人公とし、之に大姫君、中君、浮舟の三女を配し、また若干の人物、事件を錯出して叙事の變化を務めたり。故に、古來後の十篇をば、別に『宇治十帖』とも云へり。前なる四十四篇に見えたる人物は、其の性情率ね中庸にして、善悪共に極端なるものなし。之を概言すれば、諸の美性、才能を兼備したる王孫公子が壯麗なる平安城裡に泰平を謳ひ、風流を盡して、幸運なる世



茶式部

清少納言



『源氏物語』  
の文章

路を過ぎゆくのみ。『宇治十帖』は大に之と趣かはりて、其の主人公の運命稍悲劇の傾向を有せり。然れども、其の人物の性行、事件の推移、景象の配合等、能く統一せられたることは、彼此相同じ。

其の文章の典雅流麗なるは、國文中其の匹敵を見ざるにこそ、之を以て景情を寫し、事を論ずるに、一として其の法を具へ、其の妙を究めざるなし。就中、優美なる性情若しくは景象を寫せる處は、議論を旨としたる處よりも、一層の妙趣あるを覺ゆ。

「若紫」の一節

日もいと永きにつれ、なれば、夕ぐれのいたうかすみたるに紛れて、かの小柴垣のもとに立出で給ふ。人々は返し給ひて、惟光ばかり御供にて、のぞき給へば、たゞこの西おもてにしも、持佛すゑ奉りて、おこなふ尼ありけり。すだれ少し上げて、花たてまつるめり。中の柱に倚りゐて、脇息の上に經



をおきて、いとなやましげに讀み居たる尼君、たゞ人と見えず、四十あまりにて、いと白くあてに、瘦せられたれど、つらつきふくらかに、まみの程、髪のうちくしげにそがれたる末も、なか／＼長きよりもこよなう今めかしきものかなど、おはれに見給ふ、清げなるおとな二人ばかり、さてはわらはべぞ出入り遊ぶ。中に十一ばかりにやあらむと見ゆて、白ききぬ山吹などのなれたる着て、走り來たる女ど、おまた見えつる子どもに似るべうもあらず、いみじう生先見えて、うつくしげなるかたちなり。髪は扇をひろげたるやうに、ゆら／＼として、顔はいと赤く摺りなして立てり。何事ぞや。わらはべど腹立ち給へるかどて、尼君の見上げたるに、少しおぼえたる所あれば、子なゆりを見給ふ。雀の子をいぬきが逃しつる。ふせごの中に籠めたりつるものをとて、いとくちをしと思へり。この居たるおとな、例の心無しの、かゝるわざをして、さいなまるゝこそいと心づきなけれ。いづかたへかまかりぬる。いとをかしう、やう／＼なりつるものを、鳥などもこそ見つくれとて、立ちて行く。髪ゆるらかに、いと長く、めやすき人なゆり、少納言のめのとどぞ人いふめるは、この子のうしろ見なるべし。尼君、いであなをさなや。いふか

ひなう物し給ふかな、おのがかく今日明日になりぬる命をば、何ともおぼしたらで、雀慕ひ給ふ程よ。罪得ることぞと常に聞ゆるを、心うくとて、こちやどいへば、ついでたり。つらつきいとらうたげにて、眉のわたり打けぶり、いわけなくかいやりたる額つき、かんざしいみじうつくし、ねびゆかむ様ゆかしき人かなど、目とまり給ふ。ざるは限りなう心を盡し聞ゆる人に、いとよう似奉れるが、まもらるゝなりけりど、思ふにも涙ぞ落つる。尼君髪をかきなでつゝ、けづる事をばうるさがり給へど、をかしの御ぐしや。いとはかなうものし給ふこそ、おはれにうしろめたけれ。かばかりになれば、いとかゝらぬ人もあるものを、故姫君は、十二にて殿におくれ給ひし程、いみじうものは思ひ知り給へりしぞかし。たゞ今おのれ見捨て奉らば、いかで世におはせむとすらむとて、いみじう泣くを見給ふもすゝろに悲し。をさな心地にも、さすがに打まもりて、ふしめになりてうつぶしたるに、こぼれかかりたる髪つや／＼とめでたう見ゆ。

『源氏物語』の外、なほ式部に一の著書ありて、『紫式部日記』といふ。式部はまた和歌をも能くせり。



紫式部の歿後は、小説の著作俄に頓挫して、只其の子の大貳三位が著したる『狹衣物語』と作者未詳なる『とりかへばや物語』との二篇あるのみ。而も是等は大作『源氏物語』を見來たりし眼には、さかくの批評を下すべき程の價值を認むること能はず。此の期の末に覺しき頃に『唐物語』といふ書出でたり。此は支那の話説數十項を國文に意譯したるものにて、毎項の末に和歌一首を掲ぐ。歌文共に力あり。其の譯者は詳かならず。

『狹衣物語』  
『とりかへばや物語』  
翻譯小説  
『唐物語』

### 第三節 歌序

歌序の二種

歌序と名づくる文に二種の別あり。一は歌集の序にして、他は通例歌のはしがきと呼ばるゝ小序是れなり。是等は『萬葉集』時代には、専ら漢文にて書かれしが、本期に入り、醍醐天皇

『古今集』の序  
『大堰川行幸和歌』の序

の延喜の頃より、始めて國文にてもせらるゝこととなりぬ。歌序の中にて最も名高きを『古今集』の序と『大堰川行幸和歌』の序とす。前者は云ふまでもなく歌集の序にして、後者は歌の小序なり。是等は、共に紀貫之の作にかゝり、等しく假名もて書かれたれど、當時行はれたる『文選』などの漢文體に倣へりごおぼしく、莊重なる中にも華麗ならむことを力め、稍煩瑣に失する嫌あり。二者共に、また縁語、疊語、對句等を並べ、枕詞をも用ゐたり。

此の外、源順の作れる『庚申夜奉和歌』の序は『古今集』の序につぎて優れりとの評あり。平兼盛の『子日行幸和歌』の序、善滋爲政の『高陽院行幸之時應制奉和歌』の序、藤原通俊の『後拾遺和歌集』の序など、亦見るべし。『後拾遺』以後のものには佳作あり。

『大堰川行幸和歌』の序

第三章 散文 第二節 小説 第三節 歌序



あはれ我が君の御代長月の九日ときふいひて残れる菊を惜み給ひ又暮れぬべき秋を惜み給はむとて月の桂のこなた春の梅津より御船よそひて渡守を召して夕月夜をぐらの山のはどり行く水の大堰の川邊に行幸し給へれば久方の空には棚引ける雲もなくみゆきをまぢ流るゝ水底には濁れる塵なくて御心にぞ協へると詔して仰せ給へることは秋の水に浮びては流るゝ木の葉とわやまたれ秋の山を見れば織る人なき錦とおもはぬ紅葉のはの山風に散りて曇らぬ雨ときこぬ菊の花の山本に残れる空なる星と驚き霜の鶴河邊に立ちて雲のおかるゝかと疑はれ夕の猿山のかひになきて人の涙をおとし旅の雁雲路にまぢひて玉章と見ぬ遊ぶかもめ水に栖みて人になれたり入江の松幾世経ぬらむといふ事をぞ詠ませ給ふ我が筆短き心のこのもかのもにまぢひつたなき言の葉吹く風の空にみだれつゝ草の葉の露とともうれしき涙れち岩根と共に悦ばしき心ぞ立ちかへるもし此の言の葉世の未まで残り今を昔にくらべて後の今日を聞かむ人海人の栲繩くりかへし忍ぶの草の忍ばざらゆや。

日記  
紀行

## 第四節 日記及び紀行

當時日記と名づけしものに、日々の出来事を記録せるものと旅行中に觸接したる事柄を寫せるもの即ち紀行との二種あり。故に、是等の書中の記事は、たゞひ作者の僻見混ぜりとするも、大抵は實事と見るを得べし。其の文章は、歴史の如き謹嚴なる風なく、小説の如き艶麗ある態なし。雖も、率直なる中に一種の妙味あり。日記に屬するものに『蜻蛉日記』、『和泉式部日記』、『紫式部日記』、『讚岐典侍日記』あり。紀行に屬するものに『土佐日記』、『更科日記』あり。此の中、『土佐日記』、『紫式部日記』とは最も賞揚せらる。

『土佐日記』

『土佐日記』は、紀貫之が延長八年土佐守となりて赴任し、五年の後承平四年に任滿ちて、京に還りし時の船路の紀行な



り。全篇亡兒追懷の悲みをこめながら、或は風波につけて海賊の難を思ひ、或は徒然のあまりに滑稽の情を叙ぶるなどして、五十餘日の事を記せり、其の文章は輕快にして洒落なり。

大津より浦戸に至る船路

廿七日、大津より浦戸をさして漕ぎ出づ。かくあるうちに、京にて生れたりし女子こゝにして俄に失せにしかば、此の頃の出立ちいそぎを見れど、何事もえいはず。京へ還るに女子のなきのみぞ悲み戀ふる。ある人々もえ堪へず。この間にある人の讀まで出せる歌、

みやこへど 思ふものゝ 悲しきは かへらぬ人の あればなりけり  
又、ある時には、

あるものと 忘れつゝなほ なき人を いづらと問ふぞ 悲しかりける  
といひける間に、鹿兒の崎といふ處に、守のはらから又こと人これかれ酒など持て追ひ來て、磯におり居て、別れがたきとをいふ。守の館の人々の中

に、此の來る人々ぞ心あるやうにいはれはのめく。かく別れがたくいひて、かの人々の口綱も諸持にて、此の海邊にて荷ひいだせる歌、

をしと思ふ 人やとまると あしかもの うちむれてこそ 我は來にけれ  
といひてありければ、いといたく愛で、行く人のよめりける、

棹させど そこひ知られぬ わだつみの ふかき心を 君に見るかな  
といふ間に、掛取ものゝおはれも知らず、たのれし酒をくらひつれば、はやく往なむとて、潮みちぬ風も吹きぬべしとさわけば、船に乗りなむとす。此の折に、ある人々折節につけて、唐歌をも時に似つかはしきを云ふ。又、ある人西國なれど、甲斐歌など歌ふ。かく歌ふうちに、ふなやかたの塵も散り、空行く雲もたゞよひぬとぞいふ。ゆる。今宵浦戸にとまら。藤原言實橋季衡と人々追來たり。

『更科日記』

『土佐日記』の後、大凡百餘年、『更科日記』の出でしまでは、世に紀行といふべき書なし。『更科日記』は菅原孝標の女の作にて、治安三年、父と共に上總の國より京に上りし時より、夫俊通の



病歿せし頃までの事を記せり。

『紫式部日記』は、紫式部が、夫宣孝の歿後、上東門院に宮仕せし頃の記録なり。書中に、中宮御懷妊の時より後一條天皇及び後朱雀天皇の御誕生、さては其の祝賀の次第等を記し、又己が日本紀局の稱を得し事などを載せたり。文章は、『源氏物語』に次ぎて、精到、流麗なり。

○御産の祈

秋のけはひの立つまゝに、土御門殿のありさま云はむかたなくをかし。池のわたりの梢ども、遣水のほとりの叢、おのがじし色づきわたりつゝ、大かたの空も艶なるにもてはやされて、不断の御讀經の聲々あはれまさりけり。やうく涼しき風のけしきにも、例の絶えせぬ水のおとなひ夜もすがら聞きまがはさる。御前にも近うさぶらふ人々はかなき物語するをきこしめしつゝ、惱ましうおはしますべかめるを、さりげなくもてかくさせ給へり。御有様などのいとさらなることなれど、うき世のなぐさめにはかゝ

『紫式部日記』

る御前をこそ尋ねまゐるべかりけれど、現心をばひきたがへたとしへなくよろづ忘るゝにも、かつはあやしき。まだ夜深き程の月さしくもり、木の下をぐらきに御格子まゐりなばや、女官はいまださぶらはじ、藏人まゐれなぞいひしらふ程に、後夜の鐘うちれどろかし、五壇の御修法ときはじめつ、われもくゝどうちわけたる伴僧の聲々、遠く近く聞きわたされたる程おどろくしくたふとし。

『蜻蛉日記』

『蜻蛉日記』は、右大將藤原道綱の母の作にて、天曆八年に藤原兼家と相識りより道綱出生の前後及び其の殿上元服の事などを記し、終に天延二年道綱二十歳に至るまでの事を記せり。單に年月の下に重要な事件若しくは所感を記したるは、長歌の處々に見えたるは、爾餘の日記に異なるどころあり。『和泉式部日記』は一に『和泉式部物語』といふ。其の作者和泉式部は、紫式部と同時代の人にて、和泉守橘道貞の

『和泉式部日記』



妻ありしが、夫逝去の後は上東門院に仕へ、後に又藤原保昌に嫁して、小式部内侍を生みぬ。式部和歌に巧にして、兼ねて漢學、佛經にも通じたり。然れども、其の素行は修らざりしが如し。其の日記は、冷泉天皇の皇子爲尊親王薨御の翌年長保五年より書き起して、其の弟敦道親王と式部と關係ありし程の事を書きつけたり。文章輕妙あり。『讚岐典侍日記』は堀河天皇に奉仕したる讚岐典侍の書けるものあり。嘉承二年、堀河天皇の御惱及び崩御の事より始めて、鳥羽天皇の踐祚の事、大嘗會の有様などを記したり。文章細密にして哀深し。

## 『讚岐典侍日記』

## 隨筆

## 第五節 隨筆

隨筆とは、著者が見聞き又は感ずるに隨ひて書きつけたる私の筆ずさみなり。本期に隨筆と呼はるべきものは、只『枕草

## 清少納言

子』一部ありしのみ。其の著者を清少納言といふ。

清少納言は歌人清原元輔の女なり。一條天皇の皇后定子に仕へて女房たりしが、父の元輔、少納言なりしかば、其の姓と官とを併稱して清少納言とぞいひし。人と爲り敏捷にして、活潑、才學當時に冠絶せり。然れども、まゝ博識を銜ひ才能に誇る傾ありて、内行も修らざりしが如し。紫式部の謹慎、謙讓なりしに比へては大に劣れりと謂ふべし。老後の事情は詳かならず、或は零落して、四國に下りきとも、又奥羽にさすらひきこもいへり。

## 『枕草子』

『枕草子』は、清少納言が其の耳目に觸れたる社會の狀態、人情の趣向、并に自己の感懷等を、種々の題目の下に、筆に任せて書きつらねたるものなり。されば、全篇きれくなる事件の集合に過ぎざりと雖も、當世の風俗習慣のありくを見ゆ



る中に、著者の性質も躍如として現はれたり。銳利なる筆法もて公卿の心さま宮媛のふるまひを評し、又は精密なる觀察によりて四季の光景殿上の有様を寫すところ、讀者をして或は痛切を覺えしめ、或は爽快を感ぜしむ。特に、道強簡潔なる筆法を以て、深長なる意味を表明するは、此の草子の特色あり。清少納言が此の草子を書きしは、おもに宮仕せし頃にて、又晩年に加筆せしもあるべしと云ふ。

四季の様

春は曙やうく白くなりゆく山際すこしわかりて、紫だちたる雲の細くたなびきたる。夏は夜月の頃は更なり、闇もなほ益飛びちがひたる。雨などの降るさへをかし。秋は夕暮、夕日はなやかにさして、山際いと近くなりたるに鳥のねどころへ行くとて三つ四つ二つなど飛びゆくさへあはれなり。まいて雁などのつらねたるが、いとちいさく見ゆる、いとをかし。日入りはて、風のおと、蟲のねなど、いとあはれなり。冬は雪の降りたるは言ふべ

きにもわらず、霜などのいと白く、又さらでもいと寒き、火など急ぎおこして、炭もてわたるも、いとつきつきし。晝になりて、ぬるくゆるびもてゆけば、炭びつ火をけの火も、白き灰がちになりぬるはわろし。

第六節 雜史

雜史

およそ、國史は、從來『古事記』を除く外は、『日本書紀』をはじめ悉く漢文なりし事、既に前に言へるが如し。而して、是等はすべて勅命にて成れりしを、醍醐天皇以後は、其の事絶えにしかば、國史といふもの久しく世に出でざりき。然るに、此の期の末に至り、物語と稱する小説の普く公衆に喜ばるゝに及び、其等に倣ひて作れる一種の歴史あらはれたり。文章其の他總ての體裁は小説に類すれど、彼の如く虚構を主とせず、専ら世上の實事を記載す。『榮花物語』、『今鏡』等即ち是れなり。『大



鏡』『水鏡』等は、異なる點も見ゆれど、大體の仕組は又おなじ。其の文章は大方美しくして、趣向また面白く、且つ漢文の正史にもまして、細密、隱微なる事までも限なく書き記したり。

## 『榮花物語』

『榮花物語』は、宇多天皇の寛平年中の事より書きはじめて、専ら村上天皇以後の事蹟を録し、堀河天皇の寛治六年に至る。其の記事多くは藤原氏の一族に關し、殊に御堂關白道長が榮花の有様を記載する事詳かなり。此の物語は、一に『世繼物語』ともいふ。卷數は四十帖。一帖毎に風雅なる題を附したること、恰も『源氏物語』に似たり。著者は分明ならず。最近の説には、何人か紫式部、赤染衛門、和泉式部等諸才女の日記、家集などを基として編纂したるものあらむといふ。其の文章は、艶麗にして精到、殊に悲哀若しくは優美なる事柄を寫せる

邊に妙處多し、但し、往々筆力の軟弱なる嫌あり。

## 『かゝやく藤壺』の一節

このごろ、藤壺の御方、八重紅梅を織りたる上着はみなから綾なり。殿上人などの花折らぬ人なく、今めかしう思ひたり。たゞむ月に藤壺までさせ給ふべくて、土御門殿いみじう拂ひ、いと修理加へ磨かせ給ふ。かくて、二月になりぬれば、ついでち頃に出でさせ給ふ。うへいとあかずさうしき御氣色なれど、有るやうあるべしとぞ。世人申すめる。さて出でさせ給ひぬ。御送りの上達部殿上人、さまざま祿どもありて、歸り給ふ。かゝる程に、内渡りねはんつれづれに思されて、このひまにいかで一宮見奉らむと思食せど、萬つゝましうて、え宜はせぬに、殿此の頃こそ一のみこ見奉らせ給はめと奏せさせ給へば、いと嬉しう思しめされて、院にも聞ぬさせ給へば、中宮參らせ給ふべきよし度々あれど、包ましうのみ思しめすに、まめやかに院も申させ給へば、思し立たせ給ふ。帥殿なども、なごか宮見奉らせ給はむに、いと御心ざしもまさらせ給はざらむ、思なるべきやうなしなど、定めさせ給ひて、そゝきたちて、二月つごもりに參らせ給ふ。御興なども事々



しければ、一宮參らせ給ふ御迎へにとて大殿の唐の御車をぎゐて參れる。それに宮姫宮奉れり。さるべき人々皆御迎へにかぎへたて、參り奉らせ給ふ殿の御心さまあさましきまで有りがたくおはしませすを、世にめでたき事に申すべし。帥殿も、わが御心のいかなればにかいと思はずなりける殿の御心かな、女御參り給ひて後はよもどこそ思ひ聞えつるに、一宮の御迎への有様などを、誠に有りがたかりける御心なりけり。我等はしもえかくはあらじとぞ、内々には聞え給ひける。

『大鏡』  
藤原爲業

『大鏡』は藤原爲業の作なり。爲業は崇徳天皇の御代の人に、官は皇太后宮大進たりき。後年僧とありて大原山に隱遁し、名を寂然と呼べり。『大鏡』の記事は、後一條天皇の萬壽三年雲林院の菩提講に於いて、百五十歳なる大宅世繼と百四十歳なる夏山茂樹とが會見に序を開き、兩人の談話に事よせて、文徳天皇の嘉祥三年より萬壽三年まで百七十六年間の事蹟を記し、中に帝王の本紀と大臣の列傳とを分てり。文章

は、縦横自在にして頗る剛健、かの『榮花物語』の優柔なることは、全く相反せり。要するに『榮花物語』と『大鏡』とは雜史中の双壁なり。

① 道長の膽勇

花山院の御時に五月しもつやみに、さみだれも過ぎて、いとおどろしくかきみだれ、雨の降る夜、御門さうくしくや思しめしけむ。殿上に出でさせおはしまして、遊びおはしましてけるに、人々物がたりしたまひて、昔悲しかりける事どもなぞ申させたまへるに、今宵こそいとむづかしげなる夜なめれ、かく人がちなるにだにけしきればゆゑ、まして、物離れたる所などいかならむ。さらむ所にひとりいなむやとねはせられけるに、ねまからじとのみ申したまひけるを、入道殿(道長)は、いづくなりともまかりなむと申したまひければ、さる所はしませす御門にて、いと興あることなり。さらばいけ。道隆は豊樂院、道兼は仁壽殿の塗籠、道長は大極殿へいけとねはせられければ、よそのきんだちは便なき事をも奏してけるかなと思ふ。又、承りたまへる殿ばらは御氣色かはりて、益なしとおぼしたるに、入道はつゆさ



る御氣色もなく、私の從者をば具し候はじ。此の陣の吉上にまれ、瀧口にまれ、一人昭慶門まで送れど仰事たべ、それより内に一人いり侍らむと申したまへば、證なき事にこそ仰せらるれば、げにとて御手箱におかせたまへる小刀さして立ちたまひぬ。今二所もにがむくおのくおはさふとぬ。子四つと奏して、かく仰せられ議する程に、丑にもなりにけむ。道隆は右衛門の陣よりいでよ。道長は承明門より出でよと、それさへ分たせたまへば、しかおはしましあへるに、中關白殿陣まで念じて、れはしたるに、宴の松原の程に、そのものともなき聲ぞもの聞ゆるに、すぢなくて歸りたまふ。粟田殿は、露臺の外までわなくくおはしたるに、仁壽殿の東面のみぎりの程に、軒とひとしき人のあるやうに見えたまひければ、ものもおぼえて、身のさふらはこそ仰事もうけたまはらめとておのくかへりまゐりたまへれば、御扇をたゞきて笑はせたまふに、入道殿はいと久しう見えさせたまはぬを、いかと思しめすほどにぞいとさりげなく、事にもあらずげにて、まゐらせたまへる。いかにくと問はせたまへば、いどのぞやかに、御刀に削られたるものをとり具して奉らせたまふに、こは何ぞと仰せら

『水鏡』  
『今鏡』

るれば、たゞにてかへりまゐりて侍らむは、證さふらふまじきによりて、高御座の南れもての柱のものを削りてとりてさふらふなりと、つれなく申したまふに、いとあさましうねばしめさる。

『水鏡』は『大鏡』に、『今鏡』は『榮花』に倣ひて作れるものあり。作者は共に中山忠親(一七九—一八五五)なりといふ。忠親は、藤原師實の曾孫にして、二條天皇以下の六朝に歴史せり。『水鏡』は『大鏡』の記載せる事蹟以前に溯りて、神武天皇より仁明天皇に至る歴代の變遷を略述し、『今鏡』又『小鏡』又『續世繼』は、後一條天皇の御宇より高倉天皇の朝までの事蹟を載せたり。其の外、『宇治大納言物語』一に、『今昔物語』といふものあり。其の體裁は以上の諸作とは大に異なりて、作者が見聞せし事を隨筆様に記し、ものの中に怪談、虚説少からず、雖も、記實の項亦多し。作者は源隆國(一六六—一七三七)なりといふ。

『宇治大納言物語』



文章は當時の普通語を其のまゝに書きなしたれば率直なり。後に出でたる『宇治拾遺物語』は、此の物語に漏れたる逸事を拾集したるものにて、體裁文章すべて前者におなじ。

高陽親王人形を作り田の中に立て給ふ事『宇治大納言物語』

高陽親王と申す人ねはしけり。此は桓武天皇の御子なり。きはめたる物の上手の細工になむありける。京極寺といふ寺あり。その寺はこの親王の立て給へる寺なり。その寺の前の河原にある田は、此寺の領なり。しかるに、天下早魃しける年、萬の所の田みな焼け失せぬとのゝしるに、まして、此田は賀茂川の水を入れて作る田なれば、其河の水絶えにければ、庭の様になりて、苗も皆赤みぬべし。しかるに、高陽親王此をかまへ給ひけるやう、たけ四尺ばかりなる童の左右の手にうつはものを捧げて立てる形を作りて、此田の中にたてゝ、人その童の持ちたるうつはに水を入るれば、盛りうけては即ち顔にそゝぎかくるかまへに作りたりければ、此を見る人水を汲みて、此持ちたるうつはに入るれば、盛りうけて顔にそゝぎかけくすれば、

此を興じて聞きつぎつゝ、京中の入市をなして集まりて、水をうつはに入れて、見興じのゝしる事がざり無し。かくするあひだに、其水ねのづから干田に多くみちぬ。其時に童をとりかくしつ。又水かわきぬれば、童を取り出して、田の中に立てつ。されば、また前の如く人集まりて水を入るゝ程に、田に水みちぬ。かくして、其田つゆ焼けずしてなむ止みにける。これいみじきかまへなり。これも御子の極めたる物の上手風流のいたる所なりとぞ、人はやしけるなど、語り傳へたるとなり。



第四編 鎌倉時代の文學

第一章 總論

鎌倉時代の  
範圍

鎌倉時代とは、後鳥羽天皇の文治二年に源頼朝覇府を鎌倉に開きし時より、後醍醐天皇の建武中興の頃までを云ふ。其の間およそ百五十年なり。

其の文學の  
特徴

本期の文學には、平安時代のに似たるものあり。歌謡の詞を飾りてひたすら艶麗ならむことを力めたるが如き、或は本期の現象を見るべけれど、實は前期の末に見えたる傾向を追うて進みたるのみ。日記紀行の文の如き、また彼の舊路をたゞれるものなり。然るに、本期に於いて始めて現はれ、而も大いなる勢力を有せし戦記文は、本期文學の異移として掲出すべき者たり。是は、啻に其の材料の嶄新なるのみならず、

其の用語文體も亦大いに平安朝のものに異ありて、頗る通俗の嗜好に適せり。此の戦記文を中心としたる鎌倉文學と平安文學とを比ぶるに、彼は一般に優美なりしが此は雄壯に、又彼は率ね樂天的なりしが此は厭世的傾向を帯びたる、共に著き差異となすべし。是れ孰れも、當代の初に於ける兵亂鬪争のおのづから人心をして勇武に傾かしめたるに、榮枯盛衰の定まりなきが、深く人心をして無常を感ぜしめたるに依る。

漢學の衰微

本期は、漢學著く衰微して、正格なる漢文を作り得るもの少く、一種異様ある擬漢文體を生ずるに至れり。其の頃出でたる『東鑑』をはじめ、『台記』、『人車記』、『玉海』、『明月記』、『山槐記』、『百鍊鈔』、『貞永式目』等、其の他、手簡の文、悉く此の種の文體なり。此等は、素より純文學あらねど、時文の大半を占めしものな



るを以て、左に一例を挙げむ。

『東鑑』の一節

（建保五年四月十七日 甲子晴 宋人和卿造畢唐船、今日召數百輩疋夫於諸御家人、擬浮彼船於由比浦、即有御出右京兆監臨給、信濃守行光爲今日行事、隨和卿之訓說、諸人盡筋力而與之、自午剋至申斜、然而此所之爲體、唐船非可出入之海浦之間、不能浮出、仍還御、彼船徒朽損于砂頭云々

言語は、前期に於けるよりも外國語の混交更に多し。戰記文殊に然り、而して、本期は、漢學の講究衰へたる結果、用語や、亂雜に傾きたり。また、戰記文などに見えたる武士の詞には、剛強の口氣に富みて、撥呼、促呼の音便を用ゐたるもの少からず。

第二章 歌謠

言語

歌界の概況

第一節 總說

平安時代の末には、兵亂頻りにして、一般に文物の進歩を妨げしが、和歌のみは、尙ほ依然として行はれ、公卿輩は勿論武人中にも詠歌に巧なるもの少からざりき。されば、戰鬪漸く止みて、政權遂に武門の手に遷りし後なる本期の状態は、大凡推して知るべし。さらぬだに從來政治に與かること稀なりし大宮人は、いよく閑を得て、心を吟詠に委ぬるもの多かりき。

本期の初には、藤原俊成なほ世に在り、後鳥羽天皇をはじめ奉り、僧西行、藤原隆信、藤原良經、源通親、鴨長明等の名人あり。殊に、後鳥羽天皇、和歌所を院中に設けて、専ら斯道を獎勵し給ひしより、土御門、順徳の二帝、藤原定家、藤原家隆、源雅經、僧寂蓮、源實朝、僧慈鎮、式子内親王等の妙手出でたり。當時歌合



## 歌合の流行

の會頻りに流行し、歌人は全力を盡くして其の勝敗を争へり。されば、題詠に思考を構ふることは、前期にまして一層巧を加へ、着想新奇にして複雑なるを喜びつ。歌集の勅撰には、『新古今和歌集』以下歴朝殆ど其の事あらざるはなく、歌學の書も亦多く出でたり。然れども、『新古今』以後の歌人は、大方『新古今』の弊をのみ學びて、單に詞の修飾を事ごしたるのみ。藤原爲家の如き當時の達人と謂はれし者すら、なほ然り。其の三子爲氏爲教爲相、各門戸を張りて師範家と稱し、妄りに法式を設くるに至りて、和歌の道次第に衰微せり。

## 和歌の衰微

此の間、長歌全く絶えて、短歌ひこり榮え、連歌また稀に見えたり。催馬樂、朗詠は漸く廢れて、専ら節調を主ごせる歌曲體のもの流行せり。是は、もとより前期に於いても散見せしが、本期に入りて一層隆盛となれるなり。

## 第二節 勅撰歌集

## 『新古今和歌集』

本期に於ける和歌の變遷は、亦勅撰歌集の上に尋ねべし。先づ『新古今和歌集』は、土御門天皇の元久二年に、後鳥羽上皇の院宣によりて、當時の名人源通具、藤原有家、同定家、同家隆、源雅經の撰進せるものなり。卷數類別等ほ、前期の諸歌集におなじ。此の集に見えたる和歌の題目は、『古今集』のそれと異ならざれども、其の着想と措辭との新奇にして餘韻深き、又は其の句調の流麗にして快活なるは、正に一機軸を出せるものなり。此の集を以て花實兩全の『古今集』に比ぶれば、彼は天然の風致に富み、此は人工の妙に富めり。かくの如く、『新古今集』は感想の上に格別の變化を見ざりしも、風調に一種獨特の所ありしかば、永く後世の稱賛を博し得たり。然れども、



詞の艶なるに比へて心の誠少きが故に、後の之を學べるものは往々纖巧の弊に陥るに至れり。

『新古今』以後の勅撰歌集

『新古今』以後には、後堀河天皇の貞永元年に、定家『新勅撰集』を撰び、後深草天皇の建長三年に、爲家『續後撰』を撰び、龜山天皇の文永二年に、爲家再び藤原基通等と『續古今』を撰び、後宇多天皇の弘安元年に、藤原爲氏『後拾遺集』を撰び、後二條天皇の嘉元元年に、藤原爲世『新後撰』を撰び、花園天皇の正和元年に、藤原爲兼『玉葉集』を撰び、後醍醐天皇の元應二年に、爲世再び『續千載集』を撰び、同天皇の正中二年に、藤原爲藤『同爲定』、『續後拾遺集』を撰進せり。『新古今』の出で、より此の間百二十一年、勅撰歌集の數すべて九種なり。『新勅撰』以下の歌集には殆ど見るべきものなし。歌人の有名なるものも、『新古今』時代の人々にかぎれるが如し。こゝには、最も卓出せる西行、定家、家隆

實朝の四人を傳へむ。

僧西行(一七七八一—一八五〇)は、俗名を佐藤憲清といひ、鳥羽上皇に仕へて北面の武士となり、左兵衛尉に任ぜられき。資性勇敢にして武術に長じ、併せて和歌に巧なりしかば、甚だ上皇に愛せられき。然るに、二十三歳の頃、感ずる所ありけむ。官祿、妻子を棄て、僧となり、初め圓位と稱し、後西行と改めたり。生涯嘗て一處に定住せず、興に任せて四方に遊び、其の足跡殆ど六十餘州に洽かりき。詠歌は、大半悲哀の調を帶びたれど、幽玄の趣深く、爽快あるもの少からず。家集を『山家集』と云へり。又、自詠を歌合に作りなしたるものに『宮河百首』、『御裳濯の歌合』の二書あり。其の外、西行が見聞のまゝを書き集めたる佛教的隨筆に『撰集抄』あり。

題知らず

西行



津の國の なにはの春は 夢なれや 葎のかれ葉に 風渡るなり

閑ならむと思ひける比花見に人々のまうできければ

花見にと むれつゝ人の 來るのみぞ あたら櫻の とがにはありける

月

歎けてて 月やは物を 思はする かこち顔なる 我がなみだかな

藤原定家

藤原定家(一八一七—一九〇二)は俊成の子なり。世に京極黃門と稱せらる。人ご爲り躁急にして進取の氣象に富み才氣に誇る癖ありき。諸官を経て、正二位權中納言となりぬ。和歌の外、史傳を涉獵し、又詩文を作り、兼て弓馬の術にも通じたり。殊に、和歌の才は殆ど天賦にして、加ふるに家傳の奧儀、秘説を承けつぎしかば、能く一世に獨歩するに至りぬ。其の歌を作るや、専ら風格を重じ、一語一句をもちりそめにせざりしが、其の結果は歴々として所詠の上にあらはれたり。其の





著述中、歌學の書に『詠歌大概』『雨中吟』『顯註密勘』『僻案抄』等、日記に『明月記』『歌集に拾遺愚艸』等あり。定家の子爲家、また家名をおこさず、才力の見るべきものありき。

百首歌奉りし時

駒どめて 袖うちはらふ 蔭もなし 佐野の渡りの 雪の夕ぐれ

詩を歌に合せ侍りしに、山路秋行といへる心を

都にも 今やころもを うつの山 夕霜はらふ つたの細道

梅花夜薫

大空は 梅の匂ひに かすみつゝ 曇りもはてぬ 春の夜の月

藤原家隆

家隆(一八一八—一八九七)は壬生中納言光隆の子なりき。世に壬生二位といふ。歌道を俊成に學びて遂に其の奥儀を極め、定家と名を齊しくするに至れり。其の生涯に詠せし歌およそ六萬首、今に傳はるものは僅に其の十分一に過ぎざること。家集を『壬二集』又『玉吟集』と稱す。歌の趣着實にして、妄りに



新奇を衒はず、調も亦頗る流麗にして高尚なり。

湖上冬月

志賀の浦や 遠ざかりゆく 浪間より 氷りていづる 有明の月

詩に合せし歌の中に山路秋行といへるを

秋風の 袖に吹きまく 峰の雲を つばさにかけて 雁も鳴くなり

寛喜元年女御入内の御屏風に

風そよぐ ならの小河の 夕暮は 御祓ぞ夏の しるしなりける

さて、前記三人の歌は、各、長所を具へて、時輩に抽でたる所ありきと雖も、なほ多少軟弱の氣味ありて、全く時弊を脱せしものこいふべからず。此の時に當り、獨り能く剛健の風姿あるを以て、一種の異彩を發せしものあり。之を源實朝とす。實朝(一八五二—一八七九)は源賴朝の第二子あり、幼にして、兄賴家の跡をつぎて征夷大將軍となりぬ。性質温良にして、深く學問を好みたり。其の歌は高潔雄壯にて、實に當時の歌

源實朝

界に比類あきのみならず、殆ど『古今集』の風をも離れて、遂に『萬葉集』を見る趣あり。然るに、實朝は建保七年正月齡いまだ三十に滿ちずして、暗殺に遭ひ、其の才の成熟を見る能はざりしは惜しむべし。其の家集を『金槐集』といふ。

霞

ものゝふの 矢なみつくるふ 小手の上に 霞たばしる なすの篠原

太上天皇御書下預時歌

山は裂け 海はあせなむ 世なりとも 君にふた心 我れあらめやも

海邊立春といふをよめる

鹽竈の 浦の松風 かすむなり 八十島かけて 春や立つらむ

尙ほ、左に本期の歌人中、有名なる者の詠數首を掲ぐ。

題知らず

御鳥羽天皇

尋ね入る かへさは送れ 時鳥 たれゆゑ暮らす 山路とか知る

更衣

土御門天皇



きのふまで なれし袂の 花の香に 更へまくをしき 夏衣かな

題知らず

順徳天皇

百敷や ふるき軒端の しのぶにも なほ餘りある 昔なりけり

題知らず

式子内親王

花すゝき まだ露深し 穂に出でゝ ながめじと思ふ 秋のさかりを

題知らず

寂蓮法師

さびしさは その色としも 無かりけり 横立つ山の 秋の夕暮

百首歌奉りし時

藤原良經

さりとす 鳴くや霜夜の さむしろに 衣かたしき 獨りかも寝む

鴨社の歌合とて人々よみけるに月を

鴨 長明

石川や せみの小河の 清ければ 月もながれを 尋ねてぞすむ

仲の春

藤原家良

風寒み まだささらぎの 山の端に 霞むと見わた 雪のふりつゝ

千五百番歌合の歌

源 通具

梅の花 誰が袖ふれし にはひぞと 春やむかしの 月に間はゝや

春立つ心をよみ侍りける

藤原爲家

あら玉の 年はひと夜の へだてにて けふより春の たつ霞かな

袴衣幽

藤原爲氏

里どほみ 夜半の寝ざめの 秋風に それかあらぬか 衣うつなり

院百首歌の中に

藤原爲相

風すさふ かきはの草の 下葉まで ねつれば露を したふ月かけ

四季(今様)

慈鎮和尙

春の彌生の あげぼのに 四方の山邊を 見渡せば

花さかりかも 白雲の

かゝらぬくまぞ なかりける

花たちばなも 匂ふなり

軒のあやめも かをるなり

夕暮さまの 五月雨に

やまほととぎす 名のりして

秋のはじめに なりぬれば

今年もなかは 過ぎにけり

わがよふけゆく 月かげの

かたむく見るこそ あはれなれ

冬の夜さむの あさぼらけ

ちぎりし山路は ゆきふかし

心のあとは つかねども

ねもひやるこそ あはれなれ



### 第三章 散文

#### 第一節 總說

散文界の概況

鎌倉時代の散文は、平安時代の散文よりも、遙に著き發達を爲したり。先づ、其の種類のみにつきていふも、既に前期に見えたる者の外に、戦記文、註疏の類新に本期に入りてあらはれたり。次に、其の通有せる感想につきては、平安期に於いて見るべからざりしものあり。佛教思想若しくは厭世的觀念是れなり。當代の武人が生命とせし、武士道又は漢學思想の如きは、た孰れも此に見るを得べし。かの同時代にてありながら、散文は平安期のご異なる所多く、歌謡は依然として前期の風を存せしこと、一は主として不自然なる題詠をつこ

本期散文の類別

め、一は専ら人事の直寫を力めたるに依るなり。本期の散文家は多く僧侶、隱士の輩にして、其の題目とせし事は亂雜なる當時の社會なりき。散文に於ける行文の進歩に至りては、特に注意すべきものあり。漢語若しくは梵語の殊に能く國語と調和せられたることは是れなり。此に至りて、我が國語の優美、閑雅なること、外國語の森嚴、莊重なること、長短相補ひ、詞人をして其の筆を自在ならしめたり。

本期の散文を類別して、小説(附消息文)、隨筆、戦記文(附雜史)、日記(及び紀行)の四項とす。此の外、序跋、記録、註疏等の文は文學上の價值少きを以て録せず。

#### 第二節 小説(附消息文)

平安期に於いて隆盛を極めたる小説は、該期の末より漸く

小説



衰運に向ひたりしが、鎌倉時代に入りては、殊に振はずなりて、僅に『鳴門中將物語』、『秋夜長物語』、『義經記』、『曾我物語』等の數種ありしのみ。是等は孰れも著者を詳かにせず、述作の年代また不明なり。

『鳴門中將物語』、『秋夜長物語』は、殊に結構簡單なるが、其の文其の想共に前期の小説の模倣に過ぎず。『義經記』及び『曾我物語』の二書は之と趣を異にして、後に掲げたる戦記文といふものに類せり。『義經記』は源義朝の都落に筆を起して義經の一代を叙し、『曾我物語』は曾我兄弟が父の仇工藤祐經を討果したる顛末を記せり。二書共に其の材料を史上の事蹟に採りたるもの、従來の諸作が單に想像を以て其の全部を仕組みたるに比ぶれば、また一轉歩と謂ふべし。

曾我兄弟父の仇を討たむとして湯坂峠を過ぐる事『曾我物語』

『鳴門中將  
物語』  
『秋夜長物  
語』  
『義經記』  
『曾我物語』

湯坂峠にて、十郎あどの方を願み、曾我の里の朝まだき、烟もいまだ晴れやらぬ、佐川古宇津高札寺の山の方を見やりては、別れし大磯宿の事思ひ出でられければ、あれ見給へ、時致あゝの烟の見ゆるこそ住みなれし處なれ。唯今、此の山越えなん後、いづれの世に又見るべきと、涙を流しければ、五郎聞いて、殿は古里をも新里をもながめたまへ。時致は親の敵より外に、心にかゝる事も候はず。弓矢取る者は、あまり物を案ずれば、心細くなりて、思ひきられぬ習ひなり。京鎌倉の旅人の見んも耻かし。又、下人の習ひなれば、我等死なん後、何人か語りいで、さても兄弟は命やをしかりけん、此の山にては泣きたまひし、かの峯にては歎きたまひしと、言はれん事こそ耻かしけれど、馬引きかけて打つて通る。十郎申しけるは、和殿、祐成も其の儀を知らぬにはあらず。生あるもの古里を戀ふること、胡馬北風に嘶き、越鳥南枝に巢かくといふ詞もあるならずやとて、打すぐる。

○繪卷物

小説の外、また本期の始には、専ら上流の間に繪卷物といふもの行はれき。其の文章は古物語の一變せしものなるべしといふ。今傳はれるものに、『小柴垣草子』、『地獄草子』の類あり。



是等は、後世徳川時代の草双子の起源をなし、ものなり。然れども、此の頃は繪畫を主として、其の趣向は甚だ簡單に、文章また見るに足らず。

消息文

消息文は、物語に見えたること然らざることを問はず、概しては次第に文學的趣味を減少せり。就中、漢文の消息は、平安時代に於いて、國語の脈を混交して、雜駁なる文體となりしが、本期に入りては、日記記録の文が變則なる漢文となりしに似て、一層異様なる擬漢文體又は和漢混和體となりぬ。其の一斑を示す爲に、左に僧玄惠の『庭訓往來』より一節を抄す。

春始御悅、向貴方先祝申候畢、富貴萬福、猶以幸甚々々、抑歲初朝拜者、以朔日元三之次、急可申之處、被駈催人々、子日遊之間、乍思延引、似谷然忘、務花苑小蝶遊日影、頗背本意候畢、將又様弓雀小弓勝負笠懸小串之會、草鹿圓物遊三々九手夾八的等曲節、近日打續經營之、尋常射手馳挽達者、少々有此誘引、思食立給者、本望也、心事雖多、爲期參會之次、委不能廢毫、恐々謹言。

おもふに、後世の日用文即ち所謂候文は是等の文體より出でしものならむ。國語にて書かれたる消息文は漢語を加ふること、却りて多くなりたり。凡そ左の如し。

消息文 『定家御消息』

毎月の御百首能々拜見せしめ候ひぬ。凡此度の御歌まことに有難う見申候へば、年來をろかなる心に忝き仰のいなみがたさばかりをかへりみ候とて、僅に先人申え候し庭訓のかたはしを申候き、定めて後世の笑はれ草もしげりぞ候らむなれども、(中略)左道の事どもしるし付候、相構て不可及外見候、大體愚老が年來の修理の道たゞこの條々の外はまたく他の用意なく候。随分心底を殘さず書つけ侍り。必ずこの道の眼目と覺召て御覽せられ候べく候、あなかしこく。

當時の消息文例を集めたるものには、『庭訓往來』の外、藤原良經の『新十二月往來』、玄惠の『遊學往來』、僧師鍊(虎關)の『異制庭訓往來』等あり。



第三節 隨筆

隨筆

平安時代に『枕草子』ありて以來、隨筆と呼ばるべきもの久しく跡を絶ちたりき。本期に入りても、只僅に『方丈記』一部あるのみ。其の他、『發心集』、『撰集抄』、『沙石集』の如きは、多少の類似を以て便宜上此に掲ぐるのみ。

鴨長明

『方丈記』の著者鴨長明(一八一四—一八七六)は、俗稱を菊太夫といへり。壯年の頃、宮中に奉仕して從五位下に叙せられしが、源平の亂に遭ひて官を止め、山城加茂社の氏人となれり。其の後、建仁元年和歌所の寄人の職に補せられしが、幾程もなく隱遁して名を蓮胤と改めたり。平素藏する所のもの、佛像の外、只歌集等三五の書冊と箏琵琶各一張とのみ。著作には、『方丈記』の外に、『四季物語』、『發心集』、『無名抄』等あり。

『方丈記』

『方丈記』は、建曆三年、外山の草庵にて書けるものなり。其の發端に流水、泡沫の比喻を以て人生の無常を説き、進みて安元の大火、治承の颶風、養和の饑饉、元暦の地震等、其の見聞せる事實を掲げ、終に著者が厭世觀を叙ぶ。章句の修飾稍繁冗に失する嫌あり。雖も、なほ熱涙の筆端に迸る趣あり。

⑨ 人生の無常(『方丈記』)

行く川のながれは絶えずして、而ももとの水にあらず、よどみに浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて、久しくとどまることなし。世の中に在る人と住家と又かくの如し。玉敷の都のうち、棟を並べ、甍を争へる、高き、賤しき人の住居は、代々を経て盡きせぬものなれど、これをまことかどたづぬれば、昔ありし家は稀なり。あるは去年破れて今年作り、あるは大家亡びて小家となる。住む人も之にれなむ。處もかはらず、人も多かれど、いにしへ見し人は二三十人が中にわづかに一人二人なり。朝に死に夕に生るゝならむ。たゞ水の泡にぞ似たりける。知らず、生まれ死ぬる人、何方よりきたりてい



づ方へか去る。又知らず、かりのやせり、誰が爲にか心を惱まし、何によりてか目を悦ばしむる。其のあるじとすみかど、無常を争ふさま、いは朝がはの露にことならず。あるは露れちて花残り、残るといへども朝日にかれぬ。あるは花はしほみて露なほ消えず、消えずといへども夕を待つことなし。

『發心集』

『發心集』は名ある僧ごもの發心せる因縁を記せるものなり。全編に亘れる感想は毫も『方丈記』と異なることあり。其の文辭の眞率なるは、或は『方丈記』に優るべし。此の『發心集』と類を同じうせるを西行法師の『撰集抄』とす。無住法師の著せる『沙石集』といふもの、亦ほ、相おなじ。

『沙石集』

『撰集抄』

戰記文

第四節 戰記文 附雜史

平安時代に於いて、『大鏡』、『榮花物語』等の雜史が小説に似たる

體形を具へて、大いに讀者の嗜好に投ぜしことありしは、既に前に述べたり。鎌倉時代に至りては、源平の戰亂を経て、人々皆勇武に傾きしかば、戰記文といふもの、かの雜史の後を承けて、世に歡迎せらるゝこと、ありたり。戰記文とは『保元』、『平治』、『平家』等の物語及び『源平盛衰記』等をいふ。

戰記文の文章を前期の雜史體に比ぶれば、進歩の跡頗る著明なり。語勢強健にして變化に富み、或は緩く、或は急に、波瀾頓挫意に任せたり。戰記文は、鎌倉時代の文學中、最も特色あるものにして、且つ重要なものなり。

葉室時長  
『保元物語』  
『平治物語』

『保元』、『平治』の物語は、葉室大納言時長の作ならむといふ説あり。時長は藤原時光の子なり、其の閱歴詳かならず。『保元物語』は保元年間に於ける兵亂の顛末を載せ、『平治物語』は平治年間に取りし兵亂の始末を記せり。編中に於ける重要な



人物は、勇怯、正邪の性情あらはれて活動する趣あり。和漢の故事、古聖賢の格言を引きて、書中の人物、事件を評論するところ、作者の博覧を見るに足る。雖も、少しく煩に過ぎたり。又、人智の測りがたきに逢ひて、忽ち不可思議なる神佛の功德を説き、現世の成敗を見て、過去の業報となすが如き佛教的信仰は、全部を一貫せり。文章は二書共に質樸にして稍、典雅の風あり。

○ 爲朝生捕遠流の事 『保元物語』

さる程に、爲朝を搦めて参りたらん者には、不次の賞あるべしと宣下ありけるに、八郎、近江の國輪田といふ處に隠れ、郎等一人法師になして乞食させて日を送りける。筑紫へ下るべき支度しけるが、平家の侍筑後守家貞、大勢にて上りければ、其の程晝は深山に入りて身を隠し、夜は里に出て、食事を營みけるが、有漏の身なれば病出して、疾治など多くして、温疾大切の間、古き湯屋をかりて、常にわたり湯をぞしける。爰に佐渡兵衛重貞とい

ふ者、宣旨を蒙りて、國中を尋ね求めける處に、或者申しけるは、此の程、此の湯屋に居る者こそ怪しき人なれ。大男の怖しげなるが、流石に尋常げなり。歳は二十許りなるが、額に創あり。ゆゝしく人に忍ぶと覺えたりと語れば、九月二日湯屋に下りたる時、三十餘騎にて押寄せてけり。爲朝眞裸にて、合木を以て數多の者をば打伏せられたれども、大勢に取りこめられて、いひがひなく搦められけり。季實判官請取りて、二條を西へ渡す。白き水干袴に赤き帷子を着せ、髻に白櫛をぞ指したりける。北陣にて叙覽あり。公卿殿上人は申すに及ばず、見物の者市をなしけり。面の創は合戦の日、正清に射られたりとぞ聞ゆる。既に誅せらるべかりしが、以前の事は合戦の時節なれば力なし。事既に違期せり。いまだ御覽せられぬ者の體なり。且つは未代にありがたき勇士なり。暫く命を助けて、遠流せらるべしと議定ありしかば、流罪に定まりぬ。但し、息災にては、後悪しかりなるとて、肘の筋を抜きて伊豆大嶋へ流されけり。

『平家物語』

『平家物語』と『源平盛衰記』とは、前一書に倣ひて作れるものな



から、文章は一層艶麗に、結構は更に雄大なり。此の二書また作者を詳かにせず。平家は簡單にして、『盛衰記』は細密なれど、其の記事は略同一なり。和漢の故事を引き、儒佛の教理を説くさま、共に『保元』、『平治』に似、全編を通じて人生の無常なる事を示さむと力むるは、更に彼等よりも甚し。さて、二書の優劣を云へば、仕組の面白く、文章の流麗なるは、『平家』にして、意匠の周到、行文の密なるは、『盛衰記』なり。實に、『平家』は、一種の節調を具へて諷唱に便なるを以て、やがて語り物として持てはやするゝことゝなり、竟に後世の謠曲の起原を爲したり。

の 舊都の月 『平家物語』

徳大寺の左大將實定の卿は、舊き都の月を戀ひつゝ、八月十日あまりに、福原よりぞ上り給ふ。何事も皆變りはてゝ、稀に残る家は、門前草深くして庭上露茂し、蓬が袖淺茅が原鳥のふし所と荒れはてゝ、蟲の聲々うらみつゝ、

黄菊紫蘭の野邊とどなりにける。今、故郷の名残とては近衛が原の大宮ばかりぞましゝける。大將、其の御所へまゐり、先づ隨身を以て、惣門を叩かせらるれば、内より女房の聲にて、誰そや、蓬の露打ちはらふ人もなき所にと答ひれば、是は福原より大將殿の御のぼり候ふと申す。さ侍は、惣門は錠のさゝれて候ふぞ、東の小門より入らせ給へと申しければ、大將、さらばとて、東の小門よりぞ参られける。大宮は、御つれづれに昔をや思し召し出でさせ給ひけん、南面の御格子上げさせ、御琵琶遊ばされける所へ、大將つと参られければ、暫く御琵琶をさしれかせ給ひて、夢かや現か、是へ〜とぞ仰せける。源氏の宇治の巻には、優婆塞の宮の御女、秋の名残を惜しみつゝ、琵琶を調べて、夜もすがら心をすまし給ひしに、有明の月の出でけるを猶は足らずや思しけん、撥にて招き給ひけんも、今こそ思し召し知られけれ。待宵の小侍従と申す女房も、此の御所にぞ候はれける。……大將、此の女房を呼び出で、昔今の物語どもし給ひて、小夜もやう〜更けければ、舊き都の荒れゆくを、今様にこそ歌はれけれ。

舊き都を 來て見れば 淺茅が原とぞ あれにける



月の光は くまなくて 秋風のみぞ 身にはしむ  
と押し返し、三返うたひすまされければ、大宮を初め奉りて、御所中の女房たち、皆袖をぞぬらされける。さる程に夜もやうく、明けゆけば、大將いとま申しつゝ、福原へぞ歸られける。

知盛、戰場を遁れ船に乗る事『源平盛衰記』

さる程に、新中納言知盛卿は、濱へ向つて落ち給ひけるを、武藏の國司にて御座すにより、見知り奉りたりけるにや、兒玉黨團扇の旗指して、三騎喚ばつて、追懸け奉る。爰に落ち給ふは大將軍とこそ見進らせ候へ。如何にまさなく後をば見せ給ふぞとて、無下に近付き寄りければ、中納言の侍に鹽物太郎頼賢は、究竟の弓の上手、よつびき放つ矢に、旗指頭、骨を射させて馬より落つ。二騎の者共、鎧を傾けて打つて懸る。中納言危く見え給ひければ、御子武藏守知章中に阻て、引組みて落ち、取つて押へて頸を搔く。敵の童落ち重つて、武藏守をば討ちてけり。鹽物太郎頼賢、弓矢をばからと棄て、落合ひ、童が首を取り、頼賢は主の首と童が首と取り、具して馬に乗らんとしけるが、膝の節を射させ、今は最後と思ひければ、人手にかゝらとて、腹か

雜史  
『十訓抄』  
『古今著聞集』

き切つて死しにけり、其の紛れに、新中納言は井上と云ふ究竟の馬に乗り給ひたりければ、海上三町ばかり游がせて、船に乗りて助かり給ひにけり。知章は、忽ち勇兵の首を獲て、専ら壯士の名を顯し、遂に父の死を救ひ、永く己の命を亡す。船には馬立つべき所なかりければ、船のせがひより馬の頭を磯へ引きむけて、一鞭あてたれば、馬は游ぎ返りけり。阿波民部大夫成良が、あの馬射殺し給へ、敵の物に成りなると申しけれども、中納言は、敵の馬に成るとても、如何で我命を助けたらん馬をば殺すべきとて、遺惜しげにぞればしける。馬は渚に游ぎ上り、しはくどぬれて、年來の好を慕ひつゝ、船の方を見返りて、三度嘶きたりけるこそ、畜類なれども哀なれ。

戰記文の外、本期の雜史に『十訓抄』と『古今著聞集』とあり。『十訓抄』の著者は詳かならず、種々の事實を集めて十類に分ち、以て世の人の教訓とせるものなり。『古今著聞集』は橘成季の作なり。編輯の體裁は『十訓抄』に似たれど、教訓を目的としたるにあらず。二者共に、文章質樸にして、事實も半ば信憑すべし。



可庶幾才能事『十訓抄』

或人云く、本より其道々の家に生れぬれば、さる事なり。さなき類も、程々に付けては、能は必ず有るべきなり。中にも氏を受けたる者、藝ねるかにして、氏を繼がぬ類あり。道にあらざる類、能によりて道に至る徳もあれば、氏を繼がぬがため、道に至らんが爲に、彼も是もともに勵むべし。何となくぬまじはりたる折は、そのけぢめ見ぬざれども、藝能に付けて召し出され、たゞうちある我ぢちの遊び、かたへにぬきいで、何事をもしたらんは、雲泥の心地して、人目いみじく覺えぬべし。すべて、身もよく、品高けれども、あやしきが能あるに立ならぬ折は、その品その見めも必ず思ひ消さるゝものなり。たとへば、花のあたりの常磐木は、うちみるにたとへなくさめたれども、春の日數くれ、峰のあらし過ぎたる後に、みどり計り残りて、かりの匂ひ留らざるが如し。されば、桃李は一旦の榮花なり、松樹は千年の貞木なりといへり。いみじくありて身の能なきが一人あるを見るに、能あるを思ひ出づるならひなり。いはんや、能にならぬ折のけぢめをや、何ぞ況や、同様なるが、一人は能ありて一人は能なきをや、中にも、世の中のかはり行くささむ

かしよりは次第に衰へもて行くに付けつゝ、道々の才藝も又父祖には及びがたき習なれば、藍よりも青からんとはまことに希なりといへども、形の如くなりとも、箕裘の業をつがざらん、口惜しかりぬべし。

第五節 日記及び紀行

日記及び紀行

本期に日記と稱すべきものは、『辨内侍日記』、『中務内侍日記』この二書にして、紀行と呼ぶべきものは、『海道記』、『東關紀行』、『十六夜日記』の三書あり。此の中、『辨内侍』、『中務内侍』、『十六夜』の三日記は、優美あること殆ど平安時代のに近く、『海道記』、『東關紀行』とは、強健なること本期の隨筆又は戰記文等に類せり。

『辨内侍日記』

『辨内侍日記』は、中務大輔藤原信實の女の筆録にかゝれり。事實は日々の出來事なれども、文章は寧ろ歌の序詞めきたり。

第三章 散文 第四節 戰記文附雜史 第五節 日記及び紀行 一三五



『中務内侍日記』

寛元四年、後嵯峨院の御讓位より建長四年まで七年間の事を記せり。『中務内侍日記』は、宮内卿永經ごいひし人の女にて、中務内侍たりし婦人の手に成れり。此の書は、故後深草院を追悼し奉るごより伏見天皇の正應五年までの間、著者が禁中にありて見聞せる事ごもを載せたり。

『海道記』

『海道記』及び『東關紀行』は、共に京都より東海道を経て鎌倉に至れる紀行なり。『海道記』の著者源光行は後堀河天皇の頃の人。『東關紀行』の著者源親行は一九一五、光行の子なり。『海道記』の文は支那六朝の八衢體を學びたりご見えて頗る煩瑣なれご、『東關紀行』は平易にして明快あり。

浮島が原『東關紀行』

浮島が原は、いづくよりもまさりて見ゆ。此は富士の麓にて、西東へはるばると長き沼あり。布をびけるが如し。山のみどり影を浸して、空も水も一つ

『十六夜日記』  
阿佛尼

なり。蘆かり小舟處々に棹さして、群れゐる鳥多くさわぎたり。南は海の流れもて遠く見渡されて、雲の波煙の浪いと深きながめなり。すべて孤島の眼に遮るなし。わづかに遠帆の空に連れるを望む。こなたかなたの眺望いづれもとりくくに心細し。原には鹽屋の煙たぐく立ちわたりて、浦風松の梢にむせぶ。此原昔は海の上に浮びて、蓬萊の島の如く有りけるによりて、浮島となん名付けたりご聞くにも、自ら神仙のすみかにもやあらん、いと奥ゆかしくみゆ。

かけひたす 沼の入江に ふじのねの 煙も雲も 浮島が原

『十六夜日記』は阿佛尼の作なり。阿佛尼(一九四三)歿は平度繁の女にして、初め順徳天皇の皇后安嘉門院邦子に仕へて、四條ご呼びしが、後に藤原爲家に嫁したり。此の書は、爲家の歿後、其の子爲相の承くへき播磨國細川莊を、異母兄なる爲氏の押領せしかば、之を鎌倉の政廳に訴へむごて、自ら東下せし時の紀行なり。行文簡にして意長く、優美なる中に、哀切の



情充ちたり。阿佛尼の作は、此の書の外に、なほ『夜の鶴』『乳母の文』『阿佛口傳』あり。

菊川より手越までの道『十六夜日記』

廿五日、菊川を出で、今日は大井川といふ河をわたる。水いとあせて、聞きしにはたがひて、わづらひなし。河原幾里とかや、いとほるかなり。水の出でたらんれもかげれしはからる。

思ひ出づる みやこのことは 大井川 いく瀬の石の かづも及ばじ  
宇都の山越ゆるほごにしも、阿閑梨の見知りたる山伏行き逢ひたり。夢にも人をなど、昔をわざとまねびたらん心地して、いとめづらかに、をかしくも、あはれにも、やさしくも、覺ゆ。急ぐ道なりといへば、文も數多は得かゝず。唯やんごとなき所ひとつにぞ、音信きこゆる。

わが心 うつゝともなし 宇都の山 ゆめにも遠き むかしこふとて  
つたかへで しぐれぬひまも 宇都の山 なみだに袖の 色ぞこがるゝ  
今宵は手越といふ所にとゞまる。某の僧正とかやのぼり給ふとて、いと人しげし。宿かりかねつれど、さすがに人のなき宿もありけり。





## 第五編 室町時代の文學

### 第一章 總論

室町時代の  
範圍

室町時代とは、後醍醐天皇の建武中興の頃より、後陽成天皇の慶長八年徳川家康征夷大將軍となりし時までをいふ。其の間およそ二百六十餘年なり。

國文學の消  
長

本期の初の文學は、鎌倉文學の餘風を承けて、それと大同小異のものなりき。然るに、南北朝對立の頃は勿論、天下一統に歸しての後も、世は太平なるかの如くにして、實は内訌絶ゆる時なりしかば、之が爲に文學は大いに其の發達を妨げられたる觀ありき。嘉吉、應仁以降を殊に甚しとす。漢學の如きも、早く廢れて、僅に京都五山の僧徒等が其の命脈を維きたるがありしのみ。然れども、かゝる時代にありても、我が文學

漢學



は全く其の跡を絶ちたるにあらず、連歌、謠曲、御伽草子の如き、本期の特産としてあらはれたり。是等の文學は、其のまゝにては偉大、崇高の稱をば與へがたきも、之が嫩芽たる價値は充分に之あり。而して、本期の文學は僧侶、隱士の手に成りしもの多かりしを以て、佛教的趣味を帯びたること前後無比なり。

## 言語

言語は、古風の文學の衰へたると共に、舊來の法則ますます崩れて錯亂の極に達し、鎌倉時代の言語に比へては、更に多數の未熟なる漢語、梵語を交ふるに至れり。後世慣用せる詞の中にて杜撰なるものは、多く此の頃より承傳せるならむ。かゝる言語を以て綴りたる文章に粗雑なるものありしは、云ふまでもあらじ。然れども、本期の初に出でたる隨筆又は雜史の文、中頃以後に見えたる謠曲の文には、莊重なる

もの、艷麗なるものも尠からず。

## 第二章 歌謠

## 第一節 總說

## 歌界の概況

本期の初にありては、和歌は尙ほ鎌倉時代の後を承けて、甚しき非運に陥らざりき。勅撰歌集の如きも、俄に廢滅するに至らず、數十年の間に、『風雅集』以下五部を出したり。然れども、本期の歌の品性は、おしなべて鎌倉時代のそれにも及ばず、殊に、勅撰歌集の撰進全く絶えはてたる後の状態は、殆ど言ふに堪へざるものあり。後柏原天皇の『柏玉集』、冷泉政爲の『碧玉集』、西三條實隆の『雪玉集』の如き歌集は、本期の末に、『三玉集』と呼ばれて、世に珍重せられたれど、猶ほ誦すべきもの少し。



進歌の流行  
謠曲狂言の  
創始

其の他の作者は云ふに足らざるなり。蓋し、當時、秘事口傳なごいへる無用の穿鑿大いに流行し、人々和歌の精神を顧るものなかりしかば、斯道の衰微遂に此に到れるなり。然るに、此の時代には、所謂和歌とは其の精神と形體とを異にせる連歌といふもの興りて、和歌の衰微を補ひたり。又、謠曲といふもの諸種の語り物より發達して、本期の文學に異彩あらしめ、狂言といふもの亦同時にあらはれぬ。其の文、一は莊麗にして、他は輕妙なり。こゝに是等を叙する爲に、本期の歌謠を和歌、連歌、謠曲及び狂言の三種に分つ。

### 第二節 和歌

『風雅集』

和歌のますく衰へゆく間に、先づ世に出でたる歌集を『風雅集』といへり。北朝の光明天皇の御宇に、花園上皇の親しく

『風雅集』以  
後の勅撰歌  
集

撰びたまへるものなり。其の目的は當時の歌風の卑野に流るゝを歎きて、『新古今』の古體に復せしめむとするにありき。然れども、上皇の叡旨は實際成効せず、此の集は却りて奇癖に流れたるものごなりぬ。されば、其の他の不用意なりし勅撰の如何なるものなるかは、容易に推測し得べし。

『二十一代  
集』  
『新葉集』

『風雅集』につぎては、北朝の後光嚴天皇の延文四年に、二條爲定、『新千載集』を撰び、同天皇の貞治三年に二條爲明、『新拾遺集』を撰び、北朝の後小松天皇の至徳元年に二條爲遠、同爲重、『新後拾遺集』を撰び、後花園天皇の永享十年に飛鳥井雅世、『新續古今集』を撰べり。之を勅撰歌集の終とす。『古今集』より此の集まで、勅撰の歌集二十一世に之を『二十一代集』といふ。此の外になほ、『新葉集』といふあり。南朝後龜山天皇の弘和元年に、宗良親王の撰進し給へるを、勅撰に准ぜられたるあり。

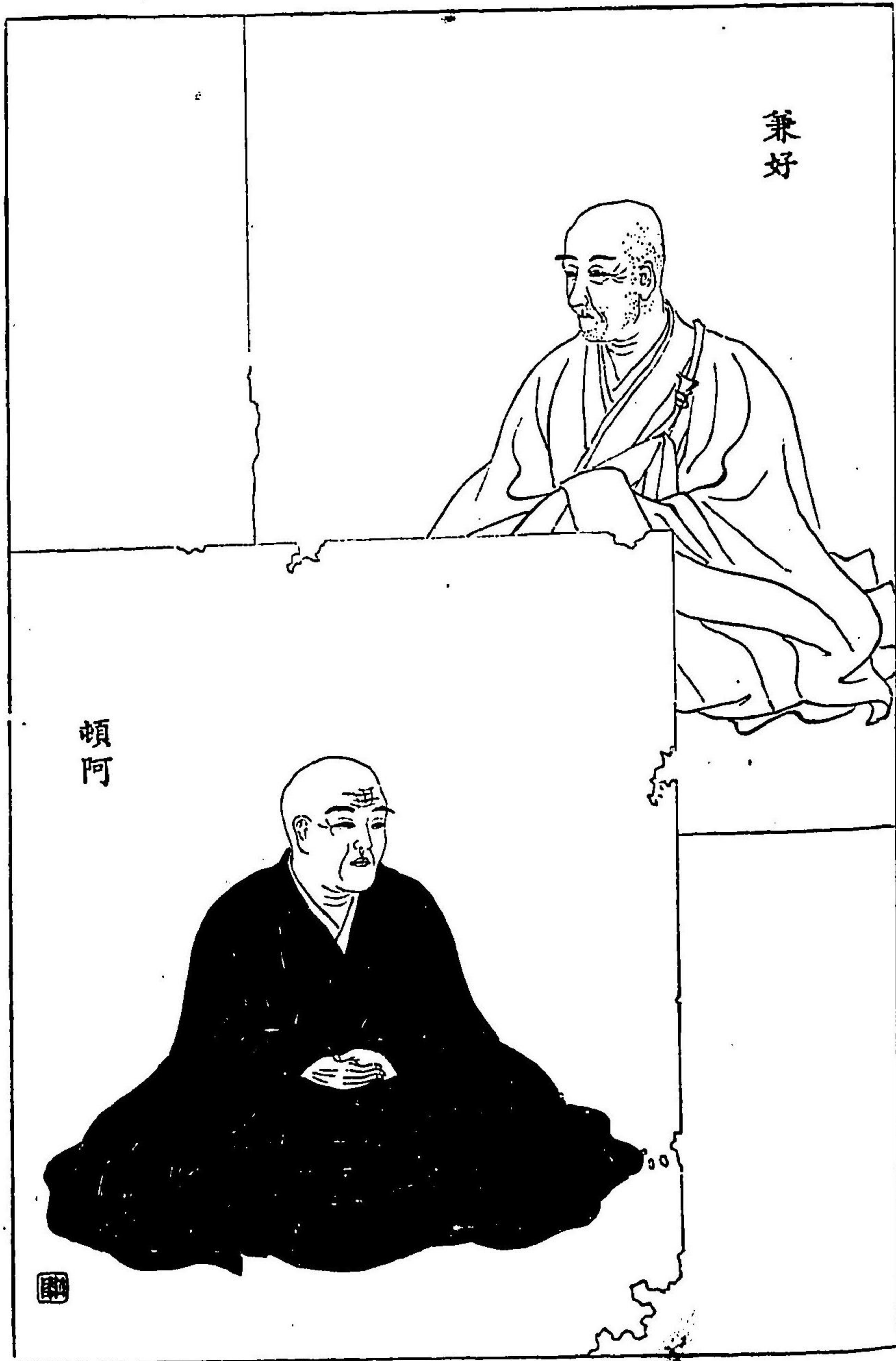


本期の主な  
る歌人

頓阿

此の集は、元弘以後南朝の人々の歌を集めたるものにて、中には雄壯なる者多し。蓋し『新古今集』以來の傑作なり。本期の歌人の中、有名なるものは、吉田兼好僧頓阿宗良親王、僧慶雲僧淨辨、今川貞世、飛鳥井雅世、太田持資、東常縁、西三條實隆等なり。此の中頓阿宗良親王、東常縁の三人傳ふべし。頓阿（一九五三—二〇三六）は、俗名を二階堂貞宗といへり。壯年の頃、叡山に上りて僧となりぬ。藤原爲世に従ひて和歌の蘊奥を極め、兼好、慶雲、淨辨と共に和歌の四天王と稱せられき。其の歌は、聲調流麗にして、意匠纖細なる所多し。然れども、當時以後は、歌人大方かゝる風體を尊びしかば、頓阿の歌は草庵體と呼ばれて、世に稱揚せられたり。家集を『草庵集』といふ。別に歌學上の著述に『井蛙抄』あり。

千五百番



兼好

頓阿



あさ日かけ 匂へる山の さくら花 つれなく消えぬ 雪かどぞ思ふ

入道二品親王家五十首歌に雉

月はなほ かすみてのこる かつ岡の わしたの原に 雉子鳴くなり

### 宗良親王

宗良親王一九七二—二〇四五は後醍醐天皇の皇子なり。幼にして僧となりしが、南北朝の亂あるに及び、還俗して名を宗良と改め、諸王臣と共に宗廟を回復せむことを謀りき。後村上天皇の朝に、中務卿征東將軍を拜し、四方の賊を討ちしに、後龜山天皇の晩年に至り、南朝の衰微愈甚しきに及び、再び僧となりて諸國に流寓せり。親王の歌集を『李花集』といふ。集中の詠には纖巧なるもの絶えてなく、句々眞率にして、胸中の悲憤を語る趣あり。當時流行せし二條家の風に比ぶれば全く相反せり。

歸馬を



かへる鷹 なに急ぐらん ねもひでも なき古里の 山と知らずや

萩の風の吹きける比よみ侍りし

もの思ふ 人の心ぞ をぎの葉に 風も吹きあへぬ 秋を知りける

東常縁

東常縁(二〇六一—二一五四)は美濃の人、下野守に任じて、將軍に近仕せり。家學として『古今集』の秘事を傳へしかば、後土御門天皇召して、和歌再興の道を説かしめ給ひしことあり。常縁の歌は、多少真情の籠りたる外、聲調平坦にして、着想も亦別に見るべきものなく。其の詞壇に重んぜられたるは、専ら『古今傳授の如き歌道の舊儀典例に通ぜしに依るか。其の歌集を『常縁集』といふ。また、歌學に關する雜錄に『東野州聞書』あり。

夏月

いりあひの 鐘きゝすてゝ 見るほども あかす傾く 夏の夜の月

島雪

すみよしの 松のあらしの 音さねて あはぢの島に 雪を見るかな  
尙ほ左に本期歌人の詠數首を掲ぐ。

柳の風に亂るゝを

兼好法師

もの思ふ 心となしに あを柳の 亂れてなにゝ もねわたるらむ

暮春の心を

法印慶運

としぐに あかで別れし 名残まで かこち添へつる 老の春かな

春の歌の中に

花園天皇

わがながめ 何に譲りて 梅の花 櫻も待たで 散らむとすらむ

朝花

太田持資

わらしふく 高嶺は雲の 色かへて 花よりあくる あさくまの宮

薄暮千鳥

後柏原天皇

空たかく 立つや千鳥の つばさのみ 入日をかくる 波の上かな

柚

冷泉政爲

暮れぬれば 柚ひきすてゝ 行く人の 下す笈や 月にさすらむ

夕幽思

西三條實隆



けふのみと 心をつけぬ 人もあれや わくる日ごとの 入相の鐘

### 第三節 連歌

#### 連歌の流行

上代より行はれたる連歌は、鎌倉時代に至りて、五十句又は百句を連ぬること行はれしが、本期の貞治、應安の頃に及びて空前の流行を致し、從來久しく中流以下の人々又は僧侶、隠士等にのみ弄ばれしもの、今は縉紳の間にも注意せらるるに至りぬ。關白二條良基(一九八〇—二〇四八)の如き、最も此のもの、獎勵を計り、其の撰びし『菟玖波集』は、やがて勅撰の歌集に准ぜられたり。又、其の『筑波問答』、『應安新式』は、いづれも連歌の基礎を固むるに力ありき。蓋し、連歌は、用語自在にして、古文學の心得なき者も、容易く之を作ることを得たるを以て、此の盛大を致し、なり。但し、當時行はれたる連歌

#### 二條良基

#### 有名なる連歌師

歌師

#### 宗祇法師

は、通常の短歌の如く、優美、艶麗を主としたり。良基の外、斯道の達人として知られしものに、救濟宗、砌心、敬兼、載等あり。其の後に、出でし宗祇は、殊に妙手と稱せらる。宗祇法師(二〇八一—二一六二)は、紀伊の人、俗姓を飯尾と呼べり。猪苗代兼載に就きて連歌を學び、後此の技を以て天下に鳴るに及び、朝廷より花の本の號を得たり。平素旅行を好み、四方に漫遊して、定居する事なかりき。宗祇の連歌は、其の長短二種の句各、獨立の意味を有し、而も前後數十聯續するを常とす。着想人の意表に出で、且つ句々の關係推移頗る面白し。其の著に『新菟玖波集』あり。良基の『菟玖波集』に倣ひて、其の以後の連歌を集めたるものなり。別に『吾妻問答』、『自讚歌集』、『初學抄』等の著述あり。

なべて世の 風ををさめよ 神の春



花もたむけの ゆふかくるころ

旅立てば かすむ山にも みちありて

かりねのそらに 近きあけがた

たが里の かねかどばかり きこゆらん

霜にふけゆく 月のさやけさ (下略)

宗祇の教を受けし者の中には、柴屋軒宗長、牡丹花宵柏の二人最も名高し。殊に、宵柏は『新式今按』を著して、連歌に關する法則を追訂せり。然れども、此の頃より連歌は煩はしき法則に束縛せらるゝこととなりて、漸く衰運に向へり。是に於いて、本歌調の連歌に對して、滑稽を主とする者新に興りぬ。即ち、俳諧調の連歌の謂なり。其の主唱者は、荒木田守武(二二三—二二〇)九及び山崎宗鑑(二二五—二二二—二二三)なり。守武の著に『飛梅千句』、宗鑑の撰に『犬筑波集』あり。彼は雅致に是は粗豪なる別ありと雖も、滑稽諧謔を主とせるは一なり。

俳諧調の連歌

荒木田守武

花よりも 鼻にありける 匂ひかな

月はねぼろに ふくるゐのしゝ

山崎宗鑑

あつたら密柑 くさらかしぬる

正月の 茶の子にことを かきばかり

又、此の頃より俳諧の前半十七音を以て一首とする事も始まりぬ。之を俳句又は發句といふ。守武宗鑑の二人亦之を能くせり。但し、其の流行、發達は江戸時代の一大現象なり。

第四節 謠曲 附狂言

本期の初、田樂猿樂の二樂共に世上に行はれ、稍下りては猿樂のみ獨り榮えたり。應永の頃、大和の人結崎清次、其の子元清、共に猿樂に巧なりしかば、將軍足利氏の寵を蒙り、同朋と

謠曲の起原 並に發達

俳句



## 謠曲の流派

## 其の曲數

## 其の作者

## 其の趣向

なりて、觀阿彌及び世阿彌と呼ばき。此の父子、從來の猿樂と田樂曲舞、今様等種々の歌曲を折衷し、古作を改め、新曲を作りて、遂に謠曲を興したり。かくて、此の新猿樂は足利義政の頃に至りて愈、流行し、やがて將軍家の式樂となりぬ。其の流派に觀世、金春、寶生、金剛の四座ありて、各、妙技を競へり。これより新曲の出づるもの益、多く、前後合せて三百番に及びぬ。其中、高砂、羽衣、熊野、松風、山姥鉢の木等最も有名なり。謠曲の作者は甚だ詳かならず。其の思想若しくは文辭につきて推測するに、大抵僧侶の手に成れりとおぼゆ。古傳に、一休、正徹、宥快等を作者の主あるものこそせり。

謠曲の趣向は、神徳を稱する者を除き、或は巷談、俗説を基とし、或は歴史小説、戰記中の一事件又は一人物を骨子とし、佛教の旨義に依りて、榮枯、盛衰の理を示さむとするものなり。

其の文章は、一種奇なるものにて、概ね從來の文學書に見えたる語句を其のまゝに轉用して、巧に綴合したり。縁語の用法は稍、杜撰なりと雖も、能く漢文調と國文調との二要素に、梵語をさへ交へ用ゐて、文勢の變化、曲折を自在にせり。一編の中に、語るべき部分と謠ふべき部分とありて、語るべきは當時の通用語なるが、謠ふべきは多く古語を以てし、之を七五の調に作れり。

## 高砂(謠曲)

ワキ次第「今をはじめの旅衣、日もゆくすゑぞ久しき。詞、そもそもこれは、九州肥後の國、阿蘇の宮の神主友成とは我が事なり。己れいまだ都を見ず候ふ程に、此度思立ち都に上り候ふ。又よき次でなれば、播州高砂の浦をも一見せばやと存じ候ふ。道行、旅衣、すゑはるくの都路を、けふ思立つ浦の波、舟路のどけき春風も、いく日來ぬらん跡未も、いさ白雲のはるくと、さしも思ひし播磨、高砂の浦に着きにけり。シテ、ツレ聲「高砂の、松の春風吹き暮



れて、尾上の鐘も響くなり。ツツ波は霞の磯がくれ、二人音こそしほの、満干なれ。シテ、サシ誰れをかも知る人にせん高砂の、松も昔の友ならで、過ぎ來し世は白雪の、積りくくして老の鶴の、峙に残る有明の、春の霜夜のれき居にも、松風をのみ聞き馴れて、心を友と菅菫の、思ひを述ぶるばかりなり。二人駈れどづれば松に事問ふ浦風の、落葉衣の袖はへて、木蔭の塵を搔かうよ、處は高砂の、尾上の松も年ふりて、老の波もよりくるや、木の下蔭の落葉かく、なるまで命ながらへて、猶ほいつまでか生きの松、それも久しき名所かな。キ詞「里人を相待つところに、老人夫婦來れり。いかに是れなる老人に尋ねべき事の候ふ。シテ詞「こなたの事にて候ふか、何事にて候ふぞ。キ詞「高砂の松とはいづれの木を申し候ふぞ。シテ詞「只今木蔭を清め候ふこそ、高砂の松にて候へ。キ詞「高砂住の江の松に相生の名あり、當所と住吉とは國を隔てたるに、何とて相生の松とは申し候ふぞ。シテ「仰せの如く古今の序に、高砂住の江の松も相生のやうに覺ぬとあり、さりながら此の尉は、津の國住吉のもの、是れなる姥こそ當所の人なれ、知る事あれば申させ給へ。キ詞「ふしぎや見れば老人の、夫婦一所にありながら、遠き住の江高砂の、浦山國を隔

て、住むと云ふは如何なる事やらん。シテ「うたての仰せ候ふや、山川万里を隔つれど、互に通ふ心づかひの、妹背の道は遠からず。シテ「案じても御覽せよ。ツツ「高砂住の江の、松は非情のものだにも、相生の名はあるぞかし、まして生ある人として、年久しくも住吉より、通ひ馴れたる尉と姥は、松もろどもに此の年まで、相生の夫婦となるものを。ツツ「いはれをきけば、れしるや。さてくさきに聞ゆる、相生の松の物語を、所にいひれくいはれはなきか。シテ「昔の人の申しは、是れはめでたき世のためしなり。ツツ「高砂といふは上代の、萬葉集のいにしへのき。シテ「住吉と申すは、いま此の御代に住み給ふ、延喜の御事。ツツ「松とは盡きぬ言の葉の、シテ「榮えは古今相れなほど、シテ、ツツ「御代をわがむるたどへなり。キ詞「よくくさけばありがたや、今こそ不審春の日の、シテ「光やはらぐ西の海の、キ詞「かしこは住の江、シテ「こゝは高砂。キ詞「松も色そひ、シテ「春も、キ詞「のどかに、地「四海波靜にして、國も治まる時つ風枝を鳴らさぬ御代なれや、あひに相生の、松こそめでたかりけれ、げにや仰ぎても、言もれろかや斯かる世に、住める民とてゆたかなる、君のめぐみぞありがたき。(下略)



狂言  
其の仕組

其の文章  
其の曲數

當時、猿樂の能の眞面目なるに反し、専ら痴態を装うて、滑稽諷刺の趣を演ずる樂劇ありき。之を狂言と稱す。其の仕組は極めて簡單なれども、往々人間の弱點を衝きて、痛快を覺えしむるものあり。其の文章は、當時の口語を其のまゝに寫せるものにて、修飾を施さざる中に、一種の趣を具ふ。此は謠曲と異なりて、謠ふ部分甚だ少く、或は全く無きもあり。曲數は二百餘編に上れり。

柿山伏 (狂言)

山ぶし「大峯葛城ふみわけて、我が本山に歸らん。罷り出でたるは、大峯葛城參詣いたし、唯今下向道で御さる。よきついでなれば、檀那まはりを致さうと存する。まづくそろく參らう。やれさて、なにとやら物ほしう存するが、まださきの在所は程遠さうに御さる。なにと致さうぞ。いゑ、こゝに見事な柿が御さるほどに、一つ取つてたべうと存する。さきぬし「罷り出でたるは、此あたりの者で御さる。今日もいて、又柿を見舞はうと存する。なにと致して

やら、鳥がついて迷惑いたす。いゑ、こゝな鳥が喰ふかして、帯が落ちたが、わんざねもれつるが、上に鳥が居るか。いゑ、山伏がわがつてをるが、何と致さうぞ。いや、きやつをなぶりませうぞ。はあ、上に猿めがあがつてをる。山ぶし「はあ、柿主めが見つけをつた。なにと致さうぞ。さきぬし「はあ、われは猿ぢやが、身せゝりをせう事ぢやが、身せゝりせぬ。異な事ぢや。山ぶし「わ、それがしを猿ぢやといふが、はあ、こりや身せゝりしませうす。さきぬし「ふん、猿にまがう所はない。猿なら泣かうぞ。山ぶし「はあ、こりや泣かさなるまい。さや〜。さきぬし「はあ、猿にまがふ所はない。猿かと思へば、犬ぢやげなわい。やい。山ぶし「はあ、又こりや犬ぢやといふ。さきぬし「犬なら泣かうぞ。山ぶし「はあ、またこりや泣かさなるまい。びよ〜。さきぬし「はあ、犬ぢや〜。犬かと思へば、猿ぢやげなわい。やい。山ぶし「はあ、こりや又猿ぢやといふ。さきぬし「猿ならとぼぞよ。山ぶし「とぼぞなるまい。さきぬし「猿ならとぼぞよ。〜。ありや飛んだは。山ぶし「あいた、いた。やい、そこな者。それがしが木のそらにゐれば、貴い山伏を、いや犬で候の、猿で候のと言うて、なせに腰をぬかしたぞ。急いでくすろうてかやせ。さきぬし「やい、そこな者。柿をくつて、恥しくば、御免なれと言うて、たつとせでい



ね山ぶし「やい、そこな者、山伏の手柄には目に物を見せうぞよ。かきぬし」柿盗みながら、小言を言はずとも、急いでいね山ぶし「ぢやういふか、物に狂はせうが。かきぬし」山伏たけなるまいぞ、山ぶし「ぢやういふか、それ山伏といつば、役の行者のあとをつぎ、難行苦行昔の行をする。今此行力かなはぬとて、一祈りぞ祈つたる。橋の下の菖蒲は、たが植ゑた菖蒲ぞ。かきぬし」やい、山伏、たかしの事せずともいね山ぶし「やい、ぢやういふか、今一祈りぞ祈つたる。ぼうろぼん。ぼうろぼん。ぼうろぼん。そりやみたか山伏のてがらには、物に狂ふは手柄ではないか。

### 第三章 散文

#### 第一節 總説

本期の散文は、其の大體に就きていへば、鎌倉時代のものと相距ること遠からず、即ち各種の散文の通有せる思想も佛

#### 散文の類別

教的臭味を帯び、文章も亦和漢混交の體なりき。但し、本期の特色は、一般には質實にして曲折なきこと、前期に流行せし繪巻物の發達して御伽草子といふものになれることなり。尙ほ、廣く著述界に就きて言へば、本期の初に北畠親房あり、中ころ今川貞世了俊あり、末に一條兼良あり、皆博學にして見識時輩に越え、述作する所少からず。雖も、概ね故實考證等の實用を主とせるものなり。予輩は爰に文學上重要なものゝみを擧げて、隨筆、雜史(附戰記文)、御伽草子の三項に分たむとす。貞世兼良及び北條氏康の作中數種は、多少文學的價値を具ふるものあり。雖も、大方は古文を擬せるものにて、特に評すべき節なければ、こゝに論ぜず。



## 第二節 隨筆

隨筆

本期に隨筆の名を冠せしむべきものは、亦たゞ一部の『徒然草』あるのみ。其の著者は僧兼好なり。

兼好法師

兼好法師(一九四三—二〇一〇)は卜部氏にして、其の家世々神道を以て官に仕へたり。兼好初め吉田といふ處に住して吉田兼好と呼ばぬ。伏見後伏見天皇の御宇に禁中の瀧口に仕へ、後二條花園天皇の朝に六位藏人左兵衛尉に任ぜられ、次いで後宇多院の仙洞に仕へしが、感ずることありて僧となり、俗名のまゝを音讀して兼好法師と稱せり。それより諸國を歴遊せしが、留りては仁和寺の邊なる雙が岡又は伊賀の密乘院に住みき。

『徒然草』

其の著『徒然草』は兼好か何くれとなく書き集めたるものにて、前後の連絡なき、きれぐなる文、長短すべて二百四十餘

編より成れり。記する所は、大抵佛説に基き、又は老莊の説を採りて、所懐を漏らしたるが多く、其の他、儒學の教義を記せる、或は公事有職の道を叙へたる、或は和歌を論じ、或は男女の性情を説くなど、場合に應じて謹嚴、激切、滑稽、飄逸等の變化究りなく、最も觀察の力の凡ならざるを見る。文章は『源氏物語』『枕草子』などを學びて、之に『文選』『白氏文集』又は老莊佛氏の語などを交へたり。

兼好の和歌

兼好は、又和歌にも巧にして、其の頃頼阿等と共に和歌の四天王と稱せられき。歌集ありて後世に傳ふ。

猫またといふもの『徒然草』

奥山に猫またといふ物有りて、人をくらふなると人のいひけるに、山ならねども、これらにも猫のへあがりて、猫またになりて、人取る事はあなる物をといふもの有りけるを、なに阿彌陀佛とかや、連歌しける法師の、行願寺



の邊に有りけるが聞きて、ひとりわりかん身は心すべきことにこそと思ひける。夜ふくるまで連歌して、たゞひとりかへりけるに、小河のはたにて、音にきゝし猫また、あやまたずあしもとへふと寄りきて、やがてかきつくまゝに、首のはどをくはんとす。肝心も失せて防がんとするに、力もなく、足もたゝず、小河へころび入りて、助けよや、猫また、よやくとさけば、家々より松などもとして走りよりて見れば、此わたりに見しれる僧なり。こはいかにとて、河の中より抱きこしたれば、連歌のかけ物とりて、扇小箱など、ふどころに持たりけるも、水に入りぬ。稀有にして助かりたるさまにて、はふく家に入りけり。飼ひける犬の、暗けれど、主を知りて、飛びつきたりけるとぞ。

秋の月 (同)

秋の月はかぎりなくめでたきものなり。いつとても月はかくこそあれど、思ひわかざらん人は、無下に心うかるべき事なり。

第三節 雜史 附戰記文

雜史  
戰記文

『神皇正統  
記』及び源  
親房

爰に本期の雜史として録すべきは、『神皇正統記』と『増鏡』との二書なり。『太平記』は近頃の研究によりて戰記と認めらるゝところなり。

『神皇正統記』は源親房の著なり。親房(一九五三—二〇一四)は權大納言師重の子にして、家を北畠或は中院と稱せり。花園天皇の御宇に出で仕へ、諸官を経て、後村上天皇の正平六年に三宮に准ぜられぬ。常に、南朝の恢復を謀り、報國盡忠の志厚かりき。

此の『神皇正統記』は、後村上天皇の興國中の作にて、神代より興國の初に至るまでの事歴を敘し、我が國體の他邦に秀でたる所以を説き、神器の相承、現在を明かにし、以て南朝の正統たるべき事を示せり。其の間、往々神佛の利驗、天道の順環を述べたる如きは、稍煩はしき心地す。雖も、公明正大の



氣書中に充ちて、著者の人ご爲りを想像せしむ。文章は端正にして雅健なり。

親房の著書は『正統記』の外に、『職原抄』、『元々集』、『古今集註』等あり。皆其の學識を見るに足る。

廢帝仲恭天皇の條『神皇正統記』

廢帝諱は懷成、順徳の太子、御母は東一條院藤原光子、故攝政太政大臣良經の女なり。承久三年春の頃より、上皇思召し立つ事ありければ、俄に讓國し給ふ。順徳御身を輕めて、合戦の事をもひとつ御心にせさせ給はん御謀にや、新主に讓位ありしかば、即位登壇までもなくて軍破れしかば、外舅攝政道家の大臣の亭へ遁れさせ給ふ。三種の神器をば閑院の内裏に捨てられにき、讓位の後七十七ヶ日の間、暫く神器を傳へ給ひしかば、日嗣には加へ奉らず、飯豊の天皇の例になぞらへ申すべきにこそ。元服などもなくて、十七歳にてかくれました。扱も、其の世のみだれを思ふに、誠に末の世には迷ふ心もありぬべく、又下の上を凌ぐ端ともなりぬべし。そのいはれ





をよく辨へらるべき事に侍り、頼朝勳功は昔より類なき程なれど、偏に天下を掌にせしかば、君として安からず思召しけるも理なり。況や、其の跡絶えて、後室の尼公陪臣の義時の世になりぬれば、彼の跡を削りて御心のまにせらるべしといふも、一應のいひなきにわらず。然れども、白河鳥羽の御代の頃より、政道の古き姿やうく衰へ、後白河の御時兵革起りて、姦臣世を亂り、天下の民殆ど塗炭に落ちにき。頼朝一臂を振ひて、其の亂を平けたり。王室は古きにかへるまでなかりしかど、九重の塵もをさまり、萬民の肩もやすまりぬ。上下堵をやすくし、東より西より其の徳に服せしかば、實朝なくなりても、叛く者ありとは聞えず。これにまさる程の徳政なくして、いかでたやすく覆さるべき。たとひ又失はるべくとも、民やすかるまじくば、上天よもくみし給はじ。次に王者の軍といふは、科あるを討じて、疵なきをば亡さず。頼朝高官に昇り、守護の職を給ふ。これ皆法皇の勅裁なり。私に盗めりとは定めがたし。後室其の跡を計ひ、義時久しく彼れが權をとりて人の背かざりしかば、下には末だ疵ありといふべからず。一應のいはれば、かりにて追討せられんは上の御科とや申すべき。謀叛起したる朝敵の利